

近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80

朱書

^概生糸製造之儀之付る是區度之布告之
 趣も有之由委中^ニ以趣者柄^ニ不齊其質^{あり}
 上等之品多^ク裁製造人^ハ不心得^ハ方下等之製
 造^ハ自然^ト生産^ノ名譽^トをお^ウり^ハ比^シり^テ是^レを
 港^ニ於^テ生糸改令社取役^ヲ別冊^ニ通規則
 お立^ニ已^ニ来^ル諸縣^下製糸人^ハ輸^出分^ニ更^ニ右會
 社^ニ於^テ相改^メ日^ハ八^ノ子^ノ驛^ニも令社^ニ括免^ス一^ノお

冊之通規則為取立一條為會社規則之趣也
可成丈と同驛會社加入多し左一條之篤相
少得不足生系製造以多は万安事

第一條

一生系濫製以多又之上品之中粗末製
一以分造り込紛安事以之少のより不罰金
取立可十事

第二條

一生系并玉島田系与七八王子其外會社之
改を不請一々賣買不亦成事

第三條

一結残事一生系賣買製禁之事

第四條

一紙元結与銘之簿子之品用之儀亦成

此改正會所を買請可也事

第五條

一生系製造人名前一村毎に戸長より取調書
三月十五日迄お達せしめ可也事

第六條

一生系結紙より製造人名前村名未有り
判を押しお取不相成事

第七條

一製造人名前村名有り判を寸法定り有
村より彫刻出来し者及び八月五日改正會社
より製しお取可也事

但是人の判を引取られた後取落し
早に改正會社より出右判と他人の貸渡
美しき紙を交す可

況論より可きもの也

明治六年三月一日 神奈川県権令大江卓

三ノリノミヤノミヤノミヤ

一 外國人小嫁たる日本の女ハ其身小屬一たる者ト雖も日本之不動産を所有せしむることを許さば但し日本に國法並し日本政府より定允たる規則に違背することなくハ金銀動産を携持せしむるハ妨げなくとす

一 日本の女外國人を婚養子と為る者も亦日本政府之允許を受く可し

朱書

一 外國人日本人之婚養子と有りたる者ハ日本
國法ヲ從ヒ日本人多クノ分限を得
一 外國ニ於テ日本人外國人と婚嫁せんとする
者其國或ハ其近國ニ在留之日本公使
又ハ領事官ヲ願出許可を乞ふべし公使
及び領事官ハ裁下之上本國政府へ届出
る

第三拾三号

府縣

洋銀並米穀算數ノ儀月計帳ハ當四月より年
計帳ハ明治六年分ナリ別紙規則ニ照準計算
可取計此段相違ハ事

明治六年三月十四日

大藏大輔井上馨

一 諸勘定洋銀算数、我是迄何弗何十にんといこ
相記を以下の数字を已用するを以て右数
字に分ハ四捨五入之法を以て相省きせんとい
止め可申事

一 右同以米穀算数に儀も少才歩で相用する
を以て納拂を總て四捨五入之法を以て合
小止め申す尤此末に品種を合計する数小

て自然計算上種切捨ハ夕方歩を相用ハ合計
高ハ前同様之法を以合ニ止め可申事

右に通確定此事

明治六年三月 大藏省

右に通此連々趣觸連々此旨可相心乃此の
也

明治六年四月八日 神奈川縣參事高木久成

口口口口口口口口口口

第三十一号

戸籍法違々法仰出以二付而夫々觸示以趣も有之ハ

間地借店借共入籍定お和然ト致しハ相ハ不取減等

采心得以者も有之哉二付以来左之規則之通可ハツ

事

茅臺則

一 所持地也他人ニ貸渡又ハ其地ハ家作法、他人ハ貸渡

以テ印支借之、原籍國所名其家内人負亦篤ト兼合セ心

障無^{まじ}之^り貸借約定^{やくじやう}汝^なし以^も其^{その}後^{のち}地^{のち}之^の借^か主^{しゆ}より戸長^{とちやう}に
可^べ相^あ届^と事^{なり}

第二則

一 他人^{たにん}之^の地面^{ぢめん}借^か受^う家^け作^さ汝^なし或^{ある}長^{ちやう}を^を取^と建^た餘^{あま}人^{にん}に^に貸^か渡^わ以^も
節^{せつ}去^さ其^{その}之^の身^み分^{ぶん}を^をお^おト^トも家^け作^さ主^{しゆ}か^かお^おく前^{まへ}則^{のち}之^の通^{とう}兼^{けん}合^{ごう}
世^よ外^が上^{じやう}地^ぢ主^{しゆ}は^はお^お届^と地^ぢ主^{しゆ}か^かお^おく^く異^い存^{ぞん}な^なく^く以^も其^{その}之^の通^{とう}兼^{けん}合^{ごう}
當^{たう}人^{にん}務^む任^{にん}者^{しや}戸^こ長^{ちやう}は^はお^お届^と可^べ事^{なり}

第三則

一 家^け作^さ及^{及び}長^{ちやう}を^を借^か受^う務^む任^{にん}者^{しや}之^の其^{その}他^たへ引^ひ移^{うつ}以^も市^し也^{なり}當^{たう}人^{にん}
引^ひ移^{うつ}者^{しや}一^{いつ}第^{だい}二^に則^{のち}は^は做^なひ^ひ戸^こ長^{ちやう}に^に可^べ事^{なり}

第四則

一 右^{みぎ}務^む任^{にん}者^{しや}之^の親^{おや}は^は是^{こゝ}迄^{まで}友^{とも}舎^{しゃ}に^に住^す居^ぐ汝^なし以^も士^し族^{ぞく}たり^{なり}と^とも
原^{げん}籍^{せき}送^{そう}籍^{せき}未^まな^なく^くと^と申^{まを}申^{まを}す^す召^{めい}取^と以^も於^お下^{した}万^ま一^{いつ}曖^{あい}昧^{まい}と^と
者^{しや}召^{めい}取^と市^し戸^こ長^{ちやう}に^に立^た立^た願^{げん}に^に差^さ出^だす^す法^{はふ}定^{てい}可^べ事^{なり}

第五則

一 戸長の所存として地面他人に貸渡又自家作長所未貸
渡任居者被成或ハ他所に為引移し者其_まか_わくハ其
真未_まれ_まれ_ま地_ち又夫家他_たより_{より}罰金_{ばつぎん}として一ヶ月分
地代_{ちだい}店賃_{てんちん}未_ま立_た可_かナ_ナ事_事
但本_た又_た所_{しよ}立_た金_{ぎん}ハ長_{ちやう}條_{じょう}を_を籍_{せき}調_{てう}並_び用_{よう}と_と内_{うち}加_か可_か申_ま事_事

第六則

一 今日_{けふ}觸_ふ示_しハ_ハ若_し地_ち借_か家_か借_か店_{てん}借_か分_{ぶん}又_た本日_{けふ}日_{にち}日_{にち}救_{きう}十日_{じふにち}と

限_{かぎ}り_り夫_お、_、所_{しよ}調_{てう}區_く限_{かぎ}戸_こ長_{ちやう}方_{かた}に_に差_さ出_で可_かナ_ナ事_事

右_{みぎ}條_{じょう}則_{すなは}ち固_{かた}守_{まも}可_か致_せ若_し違_{ちが}背_せハ_ハ急_{きう}度_ど可_か及_{およ}所_{しよ}置_お支_し

明治六年四月九日

神奈川縣權令大江卓

如右

澳地利國ニ於テ來酉年博覽會有之ニ付テ

ハ各地方人民物産并ニ其説ヲ著シ差出候儀

ハ布告書ニ見合可為勝手候得共

官ニ於テモ 御國産何品ニ限ラズ御取集

検査之上相應之物品御差出相成候条

各地方土産ノ品々製造品ハ早々其職業

ノ者へ申付精良ニ仕立サセ都テ御買上ナニ

取計右製造ノ方法并ニ諸説トモ可成丈ヲ取

調出来次第東京博覽會事務局へ可差出
事

但此期限六月晦日迄トス精良ノ品并ニ旬

季ニ拘候品此限ニアラズ

茶紙蠟烟草砂糖ノ類土産ニ候ハ上中下

各種ノ品茶蠟烟草砂糖ハ三斤位紙ハ一束位製造為致元直

段并ニ地名製造人名前トモ相記シ其苗木并

製方ニ用ル物ノ見本製造道具ノ雛形トモ相

漆差出可申事

但其製法ノ説取調方ハ布告書ヲ参考シ

製法ノ説ナキモノハ其品ノミ差出モ妨ナシ

生糸蠶卵紙真綿蛹等ハ上中下各種ノ品

生糸真綿蛹ハ三斤位蠶餘ハ前條同段之

事

但前同斷

陶器漆器金物竹細工木細工皮細工牙

細工藤細工樺細工糸細工物等之類ハ形
ノ變リシ丈ケ同品二種ヅ差出シ餘ハ前條同
断之事

但前同断

礦鑛ノ諸類金銀銅鉄錫鉛水銀石炭土
炭堊石硯石砥石水晶瑪瑙磁石蠟石
石硝石明礬綠礬琉黃等ノ類及ヒ珠貝等
ノ類元質ノ儘ニテ差出候分ハ九四五塊位

製造之上差出候分ハ前条ニ見合差出スベシ

但前同断

禽獸蟲魚ノ類生タルモノ乾シタルモノ物ニ漬タル物
及ヒ其皮革羽毛製造セシモノ製造セサル物共元
計差出スベシ

木綿麻葛ノ類ハ其苗木及ヒ木ヨリ取タル儘ノ
物糸ニ製セシ處布ニ織成セシ迄差出スベシ其分
量ハ前条ニ見合スベシ

但布白地各種ノ紋織縞織トモ取交セ染
草染法製造器械ノ雛形其他前条ニ見

合可差出

諸織物類即錦紗綾縮緬縐子純子綸

羽二重紹糸織琥珀博多天鷲絨等ノ類

同品二種ヅ、前条ニ見合差出スベシ

但前同断

諸藥種類諸繪ノ具類製造セシモノ製造セザ

トモ各種見計一種ニ付品ニヨリ十数位ヨリ

三三斤迄差出スベシ

但藥草等之類ハ鉢植ニイタシ候事出

候分ハ可成丈ク手當イタシモ不出スベシ

木實草實ノ類茸ノ類海藻ノ類乾シタルモノ

漬タルモノ及製造セラル儘ノモノトモ前条ニ見合

セ差出スベシ

木材ノ分ハ各種木性全目ヲ著ス為メナハ巨

材ハ板ニ取リ長サ三尺位小木ハ丸ノ儘長サ

同断木口切ニシ前同断尤木品ニヨリ大小見

計ハシ

但家根ニ用ユル木皮ノ類モ差出スヘシ

培養ノ品即干鰯ノ粕等其外土地ヨリ用

肥レノ類前条ニ見合見計差出スヘシ

但用方ノ方法ヲモ書出スヘシ

右之外何品ニ限ラズ其土産ノ天産人造品

共布告書ニ見合前條之通相心得期限通

差出シ可成丈ケ 御國産海外ニ著レ聲價

候様注意致スベク尚不審ノ慮セ候ハ博

覽會事務局へ可承合事

何製造何學科タリトモ秀拔ニテ著述等モ有

之候者ハ其名前可申立御呼寄ノ上御用

朱書

ノ品モ可有之事

右之通相心得夫々取計可被申事

壬申正月

上りての取計は行へば申す事
申す事申す事申す事申す事

府縣

自今諸布告出發令毎人民熟知為之凡
三十日間便宜之地於て令揭示其事

但管下之布達之儀是迄ノ通之取計從
來高札面之儀一般熟知事之旨向後取除
あり奉

明治六年二月廿四日

太政官

壬申九月十四日
軒窓三親所
Utsunomiya Kenso

諸君

右の如く致し奉るに於て、
所々海軍に一冊の如く
餘下感心致し、
即ち海軍に一冊の如く
各海軍に一冊の如く

自今僧侶苗字相設位職中之
者も某寺住持某氏名と相稱奉
但苗字相設は管轄廳に届出奉

壬申九月十四日

太政官

右の通波作出之趣觸達条決与可
相心得考也

十

壬申九月廿六日
神奈川縣廳

Handwritten header text, possibly a name or title.

六月 申
新奈川縣廳

右ノ國大姓官ニテ一ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部
海ノ名ニテ一ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部
海ノ名ニテ一ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部
海ノ名ニテ一ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部
海ノ名ニテ一ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部

苗

華族ノ平民ニテ一ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部
字ノ名ニテ一ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部
但同苗同名ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部
其ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部

三月廿四日

太政官

右ノ通達ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部
右ノ通達ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部ニテ一ノ部

九月二日 神奈川縣廳

Handwritten signature or seal at the bottom left.

Handwritten text at the top of the right page, including a date and a name: 六月廿五日 海老三郎 殿

Main handwritten text on the right page, written in cursive style, containing several lines of Japanese characters.

僧尼服忌之儀之御製
度も無之故自今人民一般
之服忌の受事
右之通太政官ヨリ御達付觸示者
也

六月 神奈川縣廳



舊日軒奈川集一題

可

右の通大改路一途新に古體に書

の眼の心改書一

敬に御心共願自今入取一敬

人御心共願自今入取一敬

敬に御心共願自今入取一敬

戊辰七月廿六日 老之典は為奉 府條は子

八歳以上之者に毎年之扶持百歳以上

三人扶持下賜は各出布了告有之度調洩

為奉行少致向も有之哉相御厚意教之

朽貫徹不致はる不都合之玉身右調洩

之者も今般一時祝壽系下賜は条日夜

年々幸未迄四年之内八十歳以上之

年齢相涉り、平民籍を養老未詳
戴不殺分人名年齢等詳細調十月
晦日迄御出せ定めの届出若右初限迄
不届出は採用多々苦事

但従前通直といふ名老として未金不限
不物等共無二金分并現金死亡者ハ亦又
届出不及事

壬申十月四日

大藏大輔井上馨

右之通達之趣届達桑地者之相心得也

青日 神奈川縣權令大江卓

エリ子多々等々々々々々

第八十六号

華士族庶民ノ奴僕傭人等其主人工作希務品
 賣買等ノ節其金高ノ幾部分ヲ請求シ於工商
 其意ニ任セ授與致シ得意先抑ト唱へ他ノ諸
 商工立入者ヲ拒絶シ或ハ其家長ト並談ノ取
 引筋ト雖モ別錢回相貧者有之趣右モ
 高実物品工料等ノ價位ヲ失シ交換流通ノ

朱書

工部子多 何ら七人

第百八十六号

華士族庶民ノ奴僕傭人若其主人工作希諸品
 賣買等ノ節其金高ノ幾部分ヲ請求シ於商
 其意ニ任セ授與致シ得意先抑唱へ他ノ諸
 商工立入我ヲ拒絶シ或ハ其家長ト並談ノ取
 引筋ト雖モ別錢回振相貧者有之趣右
 為實物品工料等ノ價位ヲ失ニ交換流通ノ

朱書

正理之悖り無謂事之及以後右指之請求之
我考ハ勿論換與ノ考ト雖モ吃取締可
致事

明治三年三月昔

太政官

右之通 仰出之趣 觸達 係此者可也 然也

明治三年三月昔 神奈川縣參事高木久成

三ノリニテ修セラルニ又

第八十九号

今般僧侶身代限規則は相定係ニ就てハ寺院所
有之田園建造物諸器什檀家より寄附之
又ハ法用ニ必要ナル分并ニ古來傳承ノ寺寶
等ノ部分判然有立不中候てハ差支候条左ノ
規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置可中候
一 寄附帳ハ何年何月何誰寄附之田園

及別建造物坪敷法差物之質今より
で詳細又記載をべし
一什物帳又ハ法用又必用之分并に寺寶を區
別し記載をせし

一右三帳三部に相終り檀家法類共兩人以上
并其地之戸長検査之上各姓名を署し
之を調印し一部ハ戸長役所に花し一部ハ

其寺院ニ花し置函し

右之通相達候事

明治六年三月五日 太政官

右之通被 仰出之趣觸示条此旨可相心得者也

明治六年四月言 神奈川縣參事高木久成

朱書

此旨可相心得事

第百三号

自今外國人民と婚姻差許左之條規相定候條
此旨可相心得事

明治六年三月十四日 太政官

一 日本人外國人と婚姻せんとする者は日本政府の
允許を受く可し
一 外國人小嫁たる日本に女日本人より此分限を
失ふ可し若し故有つて再び日本人より此
分限を復せんとは願ふ者ハ免許を得能ふべし
一 日本人小嫁たる外國之女ハ日本之國法に従
ひ日本人より此分限を得可し

神武天皇日大前幸遙爾拜美奉良父白頭

壬午十月 式部寮

右之通御布告有之其付其所於鎮守社
其時々祭式執行四民之別なく兼拜可
致事

右之通詔示各味吉可相心得り也

壬午十月

神奈川縣権令大江阜

朱書

十一月

...

各區

村々鎮守社

旧神官

戸長副

一〇〇〇〇〇〇〇〇〇

才廿二号

上下一致通常之禮服は 仰出候月廿八日
 限上下着用不相成候条禮被相仕立之由
 雛形お添主申十一月廿二日布達おし置候處
 今般様又々 作出候も有之最前之分取消以
 間當十一月より礼服相用可申 尤禮被地合々
 羅紗其外随意なる色花製一方先般
 相違規則雛形之通のお心得此限相違也

明治六年三月四日 神奈川縣參事高木久成

三ノリと信をたす

庄屋名主年寄ホ改稱之儀ニ付

尚四月中以布告之趣ハ有之候處右

ニ付向キ一區總括之者無之事務差

起之次第も有之候ニ付各地方土

地之便宜ニ寄一區之區長商人小

區ニ副區長ホ差置候儀ハ不苦我條

給料其他諸費用共悉皆民費



積お心得可申先前大庄屋
大年寄杯も唱夜駄自己に推柄
以不正に儀も有る趣右に因襲
事務墮蔽ホる害相生夜而を難お
成る付區長差至夜向も事務不
扱方規則制限并給料ホ巨額
石調可伺出事

一死者埋葬所於て記録届方
儀去辛未十二月に布告に趣も有る
長安右埋葬所ホる出に届書に
義も各府縣廳ホる置毎年十
二月迄之分翌年二月中に紙離
形に通り表に仕立呈出に換一の致
事

右之通相達改事

壬申 十月十日 大藏大輔井上馨

右之通相達之趣觸達系此者一之由
 以得之也

壬申 十月十日 神奈川縣權令大江卓

上りし旨に依りて申上り
 申上りし旨に依りて申上り

用帟羨濃帟

三八寸 其府其縣死亡表

計	男	女
	以下十五以上	以下十五以上
	以上	以上

管内埋葬所ヨリ届出ル死者ノ負數ナレ
 ハ自他管轄ノ別ナク總テ書載スル
 勿論ナリ故ニ獨歩旅人或ハ寄留人
 又ハ乞丐等ノ種類旅舍寓居路上亦

ニ於テ若シハナシ疾病死ニ至リト年齢不分明
ナルト篤ト死人ハ點檢ノ上ト年頃相當ノ
折工書加工可申事

但當壬申年八月一日ヨリ十二月三十日迄ノ
分無遺漏書載可致儀ト可相心得事

迎來自葬取行ハ者ハ有ク之ル相成ハ處
向ハ後不相成ハ系葬儀ハ主ト神友ハ信ト信ト之内
丁相預ハ事

右之通大政官ハ事ハ能ハ尔者也

壬申
七月六日
神奈川縣廳



主甲

新太田縣

武之國大志公記

下財之事

此表自華一也

今般楠社鎮聖ニ付自今湊川神社ニ付

被稱及事

但社格之儀ハ別格官幣社ニ被列

及事

右之通太政官ニ付達有之ニ付觸示者也

甫有日神奈川縣廳

言ハレテ



Wm. W. Rockwell & Son, Ltd. 2, Strand, London

青育日 麻茶川 親 願

也

或之 眞大 如官 一 出 對 首 々 二 出 離 示 若

其 華

且 出 於 之 舞 八 同 於 官 帶 其 離 示

今 離 示 華

今 離 示 華 離 示 華 離 示 華 離 示 華 離 示 華

鼠取 或 蠅取 藥卜 唱 礪石ノ 類ヲ
調合 以 一 世間 賣買 以 身 来
處 自 今 令 禁 止 候 事

壬申 五月 三日

大政官

右 觸 示 之 也

神奈川縣

青育 廳



朱書

書
申
茶
二
總

可
論
二
三
二
九

辛酉月二日

大延官

爲自今令禁止新轉

請合... 世間賣買... 奉

廣... 藥... 器... 懸

第十九号

一土方掃除方其外稼以多し寄子人呈お

多し... 寄子人呈... 名前生國

年... 承... 人負帳相仕立要細お

記... 住居地... 戸長方占... 還壹ヶ

月... 日... 夜... 増減お... 可... 戸長方... 増減お... 日々... 出入

与心得与致浦查不都合等招致
一 大工丸官等外務い多職人等身
其由者其等戸長も都前條同様
相心得石計り事

一 戸籍裁と人負出入取調以後月前
裁係人足職人其他出入も明り
取調至り善暖時タル事もかおるハ

戸長を責免れがる儀の事

一 芝居相撲軍書講談等外寄演を考免
真行の日数も戸長におおく注意い各
一中若真行致ふりり休業之俸傷
少志これあな心付する節も責戸
長へ帰し事

一 賣上高より收税の品より并店日限并大

弓揚子^{きりやうこ}その他^{その他}収税^{しゆぜい}品^{ひん}願^{ねん}なく^{なく}店^{たみ}常^{じょう}い^いる^る
一^一以^以儀^儀これ^{これ}あり^{あり}振^{へい}平^平日^日篤^篤と^と心^心せ^せ用^用ひ^ひ
り^り登^登く^く事^事

一人^{一人}力^力車^車挽^ひ子^こ之^之者^者共^共取^と締^し規^き則^則之^之凡^凡可^可
至^至以^以爲^爲危^危角^角心^心得^得遠^遠之^之者^者互^互之^之以^以交^交友^友
後^後世^世之^之所^所居^居住^住地^地之^之戸^戸長^長共^共あ^あり^りて^て実^実係^係
之^之事^事之^之振^振存^存以^以行^行司^司任^任之^之い^いる^る一^一條^條

親^親居^居至^至甚^甚以^以心^心將^將遠^遠之^之至^至以^以來^來無^無換^換印^印
之^之人^人力^力車^車所^所持^持い^いる^る一^一式^式を^を生^生所^所名^名前^前に^に
存^存せ^せら^らる^る者^者共^共戸^戸車^車貸^貸渡^渡し^し又^又も^も挽^挽子^子を^を
至^至右^右之^之名^名共^共途^途上^上に^にか^かわ^わく^く不^不法^法に^に舉^舉動^動
す^す之^之印^印を^を戸^戸長^長共^共出^出以^以味^味に^に及^及び^び之^之顛^顛末^末
を^をあ^あり^り相^相當^當に^に罰^罰金^金を^を取^取立^立一^一事^事
一^一収^収税^税人^人之^之名^名前^前帳^帳に^に仕^仕立^立て^て之^之番^番号^号を^を記^記

一 通可事

一 右條之遠懐^{たい}之志^{たい}若^{たい}其^{たい}由^{たい}之^{たい}費^{たい}金^{たい}所^{たい}立^{たい}
可^{たい}事^{たい}

右之通可事^{たい}若^{たい}其^{たい}由^{たい}之^{たい}費^{たい}金^{たい}所^{たい}立^{たい}
致^{たい}也^{たい}

明治六年二月廿四日

神奈川縣權令大江卓

二 通可事

申

戸籍法之兼申^{たい}達^{たい}置^{たい}於^{たい}處^{たい}諸^{たい}類^{たい}
而^{たい}其^{たい}當^{たい}人^{たい}申^{たい}籍^{たい}事^{たい}留^{たい}之^{たい}則^{たい}不^{たい}亦^{たい}認^{たい}
不^{たい}部^{たい}合^{たい}之^{たい}次^{たい}第^{たい}一^{たい}有^{たい}之^{たい}在^{たい}間^{たい}以^{たい}來^{たい}申^{たい}人^{たい}
有^{たい}者^{たい}之^{たい}申^{たい}籍^{たい}事^{たい}留^{たい}之^{たい}籍^{たい}判^{たい}然^{たい}之^{たい}認^{たい}裁^{たい}
其^{たい}據^{たい}可^{たい}成^{たい}此^{たい}後^{たい}可^{たい}亦^{たい}心^{たい}得^{たい}之^{たい}也^{たい}

十月廿四日 神奈川縣權令大江卓

下 通可事

東海道三縣藩令大江町

出給 10 段 5 段 10 段 10 段 10 段

出給 10 段 5 段 10 段 10 段 10 段

出給 10 段 5 段 10 段 10 段 10 段

出給 10 段 5 段 10 段 10 段 10 段

出給 10 段 5 段 10 段 10 段 10 段

甲別道中驛之内

下鳥澤合保
上鳥澤合保
鳥澤驛

大橋合保
大橋驛

下花咲合保
上花咲合保



合券
大
合券

大
合券

合券

合券

合券
合券
合券
合券

花
咲
驛

下
初持
合券

初
持
驛

白
阿
合

黒
野
驛

右觸示あしひびの也

至申 青三 太政官
右之道改定候事みちのくまへ

駒釘改うまのくわ 影かげ 合併あひあ
駒釘驛うまのきり

甲辰前こうしん 駒釘改うまのくわ 影かげ 合併あひあ
駒釘驛うまのきり 駒釘改うまのくわ 影かげ 合併あひあ
駒釘驛うまのきり 駒釘改うまのくわ 影かげ 合併あひあ

神奈川縣

壬申 正月

廳

此の如き事は、
先般訴訟入費償却仮規則布達
致し、
先般訴訟入費償却仮規則布達
致し、
先般訴訟入費償却仮規則布達
致し、

先般訴訟入費償却仮規則布達

致し、
先般訴訟入費償却仮規則布達
致し、
先般訴訟入費償却仮規則布達
致し、

第一条

訴訟其外書類認料

一枚十六折十五字詰付
十錢 但壹枚以下モ同價

右定限

第一原告人ノ訴状ノ正本副本

第二被告人ノ答書ノ正本副本

第三 訴状又ハ答書中ニ記載シ難キ
証拠ノ書類之寫

第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出
シタル 証拠ノ書類寫

第二条

証人并引合人手間 一日月五十錢

但シ他ヨリ罷出止宿之者ハ貳十五錢ヲ増ス
但シ差添人之差モ追而定例相互追此例ニ例ル

右定限

第一 裁判所ニ於テ審問又ハ言渡シテ
受ケレ日

第二 裁判所ノ腰掛ニ於テ原告被告双
方立合ノ示決ヲ為シタル日

第三条

同旅費一日月十錢 但歸路も同断

但前同旨

右定限

第一旅行ハ日ヲ十里誥トス

第二若シ日ニ十里ヲ行ク時ハ二十銭トシ

一日五里ヲ行クハ五銭トス

第三十里誥ノ寄零六里以上ヲ一日トシ五里

以下ヲ半日トス

第四兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近

キ時ハ現ニ甲路ヲ徑ルト雖モ乙路ヲ以

テ計算スヘシ

第五瀛車又モ瀛船ニ乗ル者ハ現ニ上等

乗ルト雖モ下等ノ賃按ヲ以テ計算ス

第六本条ハ日本爰内ヲ通行スル者ノ

為ニ設ク日本爰外ノ路程ニシテ外國

人^ニ関係スル者ハ立約^{ヤク}ノ後^ノ俟^テ
確定^キスヘシ本条ヲ以テ外國人^ノ之
関係ヲ論スルヲ得ス

第四条

被告人^ノ直^チナル者^ハ一日^付五十^銭
但^レ他所^{ヨリ}罷^出止宿スル者^ハ二十五^銭ヲ増ス
原告人^ノ直^チナル者^ハ此^ノニ當^リナシ
右^ノ定^限

第二条ノ如クス可シ

第五条

同旅費^ハ一日^付十^銭

但^レ歸路^ハ同^断

右^ノ定^限

第三条ノ如クス可シ

第六条

通^行辨^別料^ハ一日^付三^圓

右定限

第二条ノ如クス可シ

第七条

翻譯料

但壹枚以下モ同價

一枚ヲ十六行十五字詰式冊

右定限

第一条ニ同シ

第八条

使賃壹里ノ内十枚

六ノ里以内ハ五枚
但五里以上六ノ里以下

右定限

第一裁判所ニテ示談中原告被告兼諾_ト

セハシタル使賃

第二裁判所ニテ示談中原告被告一方ノ

者掛裁判役ノ檢_ウ下_ルヲ経タル使賃

第三原告被告一方ノ者出訴中違約ウツクイデのウチヤクモクウチグイ

シテ出席セサルハ掛裁判役ノ檢テ

ヲ經テ違約ヲ責ムル使賃セヒ

第四原告被告双方ノ為メ又ハ一方ノ為メ

裁判所ヨリ臨時ニモハシタル使賃リント

第九條

郵便并電信料

定價

右定限

第八條ニ同シ

第十條

身代限諸雜費臨時計算ヲ定ムベシシんがひまきうしよざうび

右定限中掲ホスル條件ノ外ハ曲者まがもの

之ヲ償却スルニ及ハストス若シ定限外

曲者ヲシテ償却セシメント欲スル者尙省

ノ指令ヲ請テ然ル後ニ處分スヘシ

壬申
九月

司法卿江藤新平
司法大輔福岡孝第

右之通達之趣觸示ハ茶汁者可相_レ付_レ也

神奈川縣權令大江卓

ナリ



提線造

製造人封印

元結一本ヘニテ線引込
一線量目ハ八匁以上
五拾線正味四百目ヲ以テ提トス

一茶天也
紙印紙
但巻住舞
造人封印
可致

印

生絲印紙
赤色



曲尺五分

真綿印紙
青色



曲尺一寸

大藏省
租稅寮

41X18

兩類印紙
淡黒色



曲尺一寸

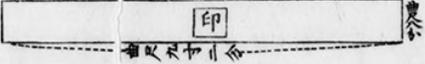
大藏省
租稅寮

41X18

會社印
封印寸法



鐵砲造其外
嶋田長手曾
代造等中結
紙印紙
但卷仕舞
ノ慶ハ製
造人封印
可致事



印

嶋田造

卷紙印紙

中結印紙

封製造

封印

鐵砲造

卷紙印紙

製造人封印

一繰量目五匁以上
凡五拾六繰正味三
百目ヲ以一把トス
凡三拾把正味九貫
目ヲ以一箇トス

一繰量目凡五匁以上
凡六拾繰正味三百目ヲ以一把トス
凡三拾把正味九貫目ヲ以一箇トス

朱書

右之通被仰出之趣觸達条
此旨可相心得者也

明漢年 神奈川縣權令大江卓

受入般華士族家督相續ノ儀、付左之通被相定

候條此旨相達候事

總領ノ男子他へ衰子ニ遣之或ハ父ノ心底ニ不應

緣故有之者ハ厄介ニ遣之其家ハ次三男或ハ他人

ニテモ當主ノ存寄ヲ以テ相續願出候節ハ聞届

不苦事

幼少ニテ家督為致候節ハ親戚又ハ他人ニテモ

相當ノ者相撰後見可為致事

當主隱居致之實子又ハ養子家督相續致之

候上其相續人多病或ハ不埒ノ後有之歟又ハ

病死致之最前ノ隱居壯健ニテ再相續願出

候節ハ聞届不苦事

但再相續人ト可稱事

當主壯年ナレトモ疾病其外無據事故有之養

子致之候處前當主疾病平愈又ハ事故相解

候節再家督致之右養子ハ實家へ立戻リ候

歟又ハ當主他へ縁付候共雙方熟談ノ上願出候ハ

聞届不苦事

本家分家親戚等ノ内當主病死致之跡子弟知

年並ニ婦女子等ノ砌死者ノ遺言又其父母並重

立候親戚及ヒ遺妻子熟談ノ上合家願出候ハ

聞届不苦事

父兄伯叔總テ目上ノ者子弟甥等ノ目下ノ家ヲ

繼承スルトキハ相續人ト稱シ養子ト稱スヘカラス

當主死去跡嗣子無之婦女子ノミテ已ヲ得サル事

情アリ養子難致者ハ婦女子ノ相續差許從前

給祿可支給事

右ノ通ニ候條萃族ハ管轄廳ヨリ正院へ相伺士族ハ

神社參詣之輩自今死葬預リ候者

雖此當日ノニ可相憚事

但服忌之者ハ從前ニ通可相心得事

右之通大政官ヨリ以達ニ付觸示者也

壬申六月 神奈川縣廳

下り子全きりんちん



Handwritten title or header in cursive script.

壬申六月

神奈川線

十右入函大宛留... 謹示者

町界... 町界... 町界...

町界... 町界...

町界... 町界... 町界...



自今各宗教等職管下長一名ヲ置一宗未
流之在歸向別紙之通相達及余此旨相
心得各管轄内諸寺院に不漏捺可相達及事
右之通教部者ヨリ達有之ニ月觸示也

壬申

六月

神奈川縣廳



六月

申奈川縣

Handwritten Japanese text in vertical columns, including the characters '申奈川縣' and other illegible characters.

前書結社規則聞届候条后来此規則改正又者追補等之儀有之候節者其都度申立可請許可者也

明治六年青言 神奈川縣權令大江卓

朱書

三
り
の
ま
る
ま
る

常省壬申第四拾六号布達^光に付る^ち地方^{ちやく}友
 及^レヒ^レ此^レ戸長^ホホ^レる各^レ人^レ氏^レより願^レ何^レ届^ホホ^レ之^ヲ
 擁^ニ閉^スル^カ又^ハ各^レ地方^レ裁判^所及^ヒ地^方友^未
 裁判^レに服^セサル^事一^身各^レ人^レ氏^レより司法^{裁判}所^に
 訴^レ訟^ス被^レ友^者申^立ル^者アル^片ハ其^レ地方^{裁判}
 所^又ハ地^方友^{より}添^補ヲ^渡ス^{ヘシ}若^シ地^方裁
 判^一所^又ハ地^方友^之三^日限^リ添^補ヲ^渡サ^ル片^ハ

朱書

直之日法裁判所日訴訟不苦事

明治六年二月

司法卿江藤新平

司法大補福岡孝弟

右之通達之趣觸達奈此方可お心得也

明治六年五月十日神奈川縣參事高木久成

三ノリノミ...

之能徹喜捨...

之能徹喜捨...

一之能徹喜捨...

おのれ...

明治六年十月十日神奈川縣參事高木久成

三ノリノミ...

朱書

生るる世にありては 信じて行ふべき事
ありては 信じて行ふべき事 信じて行ふべき事
名高しければ 名高ければ 名高ければ
名高ければ 名高ければ 名高ければ
名高ければ 名高ければ 名高ければ
名高ければ 名高ければ 名高ければ
名高ければ 名高ければ 名高ければ

信じて行ふべき事 信じて行ふべき事 信じて行ふべき事

第十卷

十一

~~~~~

~~~~~

今般勸券判官負及七非役有位大禮
服并上下一般通常之禮服別冊服章
圖式之通被相定從前之衣冠以參服下
為之直垂將衣上下等之繼而廢止被

仰付及奉

但新製之禮服不持無之內之禮服着用

之者分是之通直垂上下相用不苦之可



一武官禮服、從前之通、タレハキナ事

壬申十月十日 太政官

右之通被、仰出之額、摺、由、去、採、筋、直、系、此、旨、可、相、心、得、也

壬申神奈川縣權令大江卓

上下一般禮服之圖



上衣黑羅紗

黒色鈕釦

數之限、ト



帽



本朝天子御用之冠也

第三百五拾八号

元始祭式

孝明天皇遙拜式

神武天皇御即位日遙拜式

右別冊之通杖

仰出候条毎歲執行可致奉

但明年ハ式書各地到着之日亦又日限後
候ハ、更ニ日ヲ撰ミ可執行事

壬申
十一月二十三日

太政官

官幣國幣社并府縣社

元始祭式

一月三日宮中神敎ニ於テ

賢所并八神天神地祇所歷代皇靈ヲ

所親祭在セラル是天日嗣ノ本始ヲ歲首

祀ノ給フ義ナルヲ以テ之ヲ元始祭ト稱ス

地方ニ於テモ此ノ大典ヲ遵奉シ官社以下

祭祀ヲ修シ官員及ヒ人民悉ク參拜ス

早且神官神敎ヲ裝飾ス

午前第八時神宮ノ長府縣社ニ
祀官下同怪舎着ク

次神官ノ長敎ニ昇リ廊廡ヲ闚ク

此間奏樂

神官奏樂ヲ心得ナレハ
略スモ妨ナシ下同シ

次神官ノ次官以下府縣社ニ
祀官下同神饌ヲ傳供ス

此間奏樂

次神官ノ長祝詞ヲ奏ス 再拜

拭卷丹忍支

真神社乃大前 爾官司位苗名忍美 忌媛

白左今年一月乃今日乃年始乃祭爾

天皇乃大朝廷爾志 諸乃皇神等乎齋支

祭娘給布是以大前乎慎敬比所食所酒

籍乃廣物籍乃狹物與津藻菜遠津
 藻菜甘菜辛菜用至留麻置足故奉留
 事乎平浪氣聞食大市代乎常幣用
 堅幣用守幸假給北敷坐繼國內乎乎浪氣
 治給北仕奉留人等公民用至留麻代留幸
 無久守利幸假給北立榮志給信白須事乎

聞食北忌美忌母美白須

次神友，長玉串ヲ執ヲ拜禮

次次友有縣社以下拜禮

次次友以下神饌ヲ撤ス

此間奏樂

次各退出

神饌官幣同幣社九奉
府縣社八奉

洗米

酒二瓶

餅

海魚

川魚府縣社八之ヲ略

海菜

野菜

菓

鹽水

壬申土月

式部寮

五

鄉村社

元始祭式

早旦初去神殿ヲ裝飾ス

午前茅八時初官村社ハ初奉仕ス以下際合着ク

次初官殿ニ果リ市扉ヲ開ク

次初友以下神饌ヲ傳供ス

次初官祝詞ヲ奏ス再拜

拭卷母忌支

某神社乃大前南初友村社苗名忌支

母白左今年乃一月乃今日乃年始乃祭南大

前乎慎敬比所食市酒魚乎始乎種

物乎備奉留奉乎平短気安短気聞食

仕奉留人等公民有至留麻洩留奉無之

守幸假給比立榮粘給止倍自頂奉手圍食止

怒美怒美白頂

次初衣玉串ヲ執テ拜禮拍拜

次初掌手拜禮

次初衣以下神饌ヲ撤ス

次初衣所麻ヲ閉ク訖テ下殿ニ帷舎ニ復ス

次各退出

神饌六臺

洗米

酒

餅一重

海魚川魚ヲ用ユ

野菜

水産

壬申十月

式部寮

孝明天皇御陵遙拜式

孝明天皇御例祭新曆一月二十三日相當二付

上下一般遙拜スヘシ

府縣廳中清淨ノ地ヲ擇ミ山城ノ方ニ向ヒ新薦

ヲ敷キ高机一脚ヲ置キ机上御玉串ヲ安スヘシ玉串ハ

杖ニ白紙
ノ四垂ヲ付

拜辭

掛卷母恐支

孝明天皇乃大前子遙爾拜美奉根久白須

官員禮服用シテ拜禮畢テ御玉串ヲ燒却スヘシ

地方ノ鄉村氏神々職へ遙拜式申渡レ氏子ノ者ヲ
シテ山城ノ方ニ向ヒ遙拜セシムヘシ

壬申土月

式部寮

神武天皇御陵遙拜式

神武天皇御即位紀元ノ日新暦二月二十九日相
當ニ付毎歳御祭典御遙拜在セエ依テ御趣意

ヲ遵奉シ上下一同遙拜スヘシ

拜辭

殿談著
孝武天皇例ニ準ス

掛卷母恐支

各府縣管轄屬へ租税金納方延期の者處置の儀
壬申九月太政官公布の通ル處加息ルヘハ自然
納方致遷延ヒても不苦様心得違ハ向由有之哉
相聞以の外の事ル右ハ期限通り可相納ハ
勿論の儀ニて聊たりとし遅延可致筋ハ無之慶
是迄ハ心存違延納ハシハものモ各々方無之地
方も有之其極終不怠惰の風と生ハ幣害不少ハ
才專ら獎勵の由趣意と以加息の儀ハ 仰出ハ

事付公布小依託、限り小延納いさしとて、
置ひ様の儀有之にて、不相成ゆ条右管轄廳ふ
於て其旨辱く相心得管下末々至る迄心得違
無之様説論可致置其中無餘儀事情有之納方期
限四月中皆済の分延期相成ゆハ、公布の通可
取計不其他納期月異同有之諸物税ハ都て公布
照準し期月後二ヶ月の間ハ一ヶ月分百圓
付五十錢の割合と以利足加納可爲致三ヶ月目
よ至り猶上納相滞ゆよおろくハ本人身代限

付ひ儀を相心得是亦管下村々へ周く説示し置
可なり事

右の通は布令有之ゆ条納金觸日限通無遷延可
相納旨小前末々まで無遺漏す聞ゆ様可致此段
觸示ゆ也

壬申十月廿三日 神奈川縣權令大江卓

予の志を遂げん

北海道航海の船艦往々難破の災有之人民危懼
不少予今般開拓使に於て海上難破溺損請負
及荷爲替の仕法相設け同使用船を以て東京大
坂箱館此間往返運輸相関さし条此段相心得以
來無危懼通航可致事

但請負爲替等の仕法ハ東京大坂箱館三ヶ所
取扱所ト於て可兼合事

壬申十月廿七日

太政官

右之通被仰出之趣觸達奈此旨可相心得者也

壬申十一月十八日 神奈川縣權令大江卓

一ノノノノノノノノノノ

方今外國入と接し貿易上におゐる彼の言辭
 の通ぜざるを洋字と解し得ざるより自然各
 國の事情と疎く往々許多此財と失ふもの不
 少是獨り一家の損失のこゝならず即ち國の
 盛衰と相係りぬ餓と付今般當港に於て有志
 の者協力して市學校と開き外國人教師を雇
 ひ管内外の子弟を不拘教育して知識を関
 しり一身の營業ハ勿論國家有益の基と建ん

とす就てハ管下ノ者ハ一等ハ費を減一修學
為致ル等子付當今ノ時勢と熟思一子家
るものハ其所ハ長添書を以入學可致事
右ノ通觸達条此旨可相心得もの也

壬申十一月廿九日 神奈川縣權令大江卓

了りて候事

諸願届等差出以節是並其當人并村役入一同罷
出以得共違隔の村方等ニ於てハ一泊或ハ二泊
いこい様相成隨て入費相裁比のミみらず自
然其職業の妨と相成違惑も不寡付以來事柄不
入組書面上にて相分り以品ハ當人并差添役人
共不及罷出ニ封狀を以可差出右方法及其品の
概畧とも左の通可相心得事

心得書



第一條

一郵便其他良便を以可差出諸願届の類ハ兼て
達置ハ罫紙へ是迄の通り二通ツ相認何色も
押印いこし何紙にて成て相封し上書へハ

表

何國何郡何村
神奈川縣權令大江車殿 戸長 何の誰

郵便

月 日 發

右之通相認尤副戸長よても不苦ハ条々各の書
載致間敷ハ事

第二條

一郵便所へ差出ハとも又ハ飛脚の者相雇差出
ハ共或ハ幸便等有之差出ハとも都て村方適
意ハ致し可申事

但第一条封紙裏雜形の通郵便或ハ直便
或ハ幸便と相認可申事

第三條

一 第二條の便を以差出ル諸願届許可いこゝル旨并開届ハ趣等及差圖ハ儀ハ是並の通附札を以相達ハ事

第四條

- 一 封狀よく指出ルケ条太畧左の通
- 一 水旱損等の届
- 一 賃屋并水車免許税共外年季と定相稼居ハ類年季切替又ハ免除願
- 一 官林往還並木損等届

一 采相場書

- 一 入札觸の品望無之届の類
 - 一 川々出水届
 - 一 堤防橋梁極類破損届
 - 一 官普請願
 - 一 官普請ハ下知濟取掛申遣方右付請書差出方
 - 一 同諸色取揃届寸間改め出役願
 - 一 同取掛届
- 但官普請願并川除の模様ノ寄故障札

- 一 同出来届
- 一 東海道往還道橋破損至急届並見分願
- 一 町村鎮守社の例祭届
- 一 寺院列年の祖師忌或ハ十夜法會の類届
- 一 神官僧侶教導職并命届
- 一 寺院他行舟寺務取扱届
- 一 説教執行の届
- 一 雛形と以相達ハ取調物
- 一 改印届

- 一 送籍届
- 一 病死届
- 一 徒刑の者引取願
- 一 郷社村社取調書願
- 一 盗難届

第五條

一 右差圖書縣廳ハ相達ハ節仕立飛脚を以差立
 以分ハ右飛脚の者へ可相渡郵便を以差立候
 賃錢ハ當廳にて相拂置追て差出方相達候間

其節返入可致事

第六條

一四條掲載の各目其外當人不罷出候とも書面
よて相分ハ事柄ハ都て封狀よ可申出尤時と
して其當人呼出ハ儀シ可有之候事
右の通相定ハ間篤と注意いすハ事勢相運ハ様
可致事

壬申十一月八日 神奈川縣權令大江卓

上りよりしるはせむことよ

ハ布告并達物とも上木よいと一是道一村ハ十
枚ヨ相渡シ以上ハ達ハ村中へ行渡り視見自在
可相成ハ及て配達方煩雜ハ心得兎角手数ト
厭ハハ村くも有之哉ハ付右ハ相廢ハ已来左之
通相定ハ事

第七條

一ハ布告并達物とも上木よいと一村ハ三枚
ヨ相渡シハ事

（出）

第二條

一三枚之内一枚者高札場へ張出ゝ一枚と戸長
とも扣よいと一一枚ハ村中社寺并農家一般
へ廻達いと一可事

第三條

一也布告并達物とも其趣意戸副長と村中之も
の共へ町寧よ可事聞ハ勿論高持の者共ハ銘
この小作人等へ無洩落可爲事聞事

第四條

一右上木之分区内村數丈け取纏當廳分区内の
戸長へ相達いと付其区内村々へ至急相達可
事

第五條

一一村中廣大よて上木の分三枚よてハ不足の
村々何枚有之ハハ全く行涉ハとの儀区内
戸長へ立戸長を枚數と定日數十五日限可
事

但し戸長并社寺其外のもの共上木の分

みのため入用の者への何故よても可相渡
間本文同様可申出事

第六條

一上木の分代料一ヶ月一分村々銀六匁多々年分
四度は三月六月九月十二月取纏良便の節差出
可申事

但し村内割合方等の不公平無之様可致事
一銘々入用の分の本文割合を以一月月銀二
匁多差出ら申事

一上木の配差飛脚賃錢等之入費可成丈け不
相掛様可致ハ勿論は付區内戸長共よて厚く
注意可致尤右戸長方正相違ハ賃錢ハ方法相
定尚可相違ハ事
右之通可相心得もの也

壬申十一月四日 神奈川縣權令大江卓

朱書

子日くを 後考するに

聚

太政官三百六拾六号の御布告に相成り改正雇
人、盗家、長財、物律、條、人、雇、ハ、者、ハ、諸官
員、并、官、華、士、族、の、家、令、扶、從、執、事、隨、從、僕、婢、農、工、商
等、の、番、頭、手、代、丁、稚、一、切、男、女、の、年、雇、月、雇、日、雇、ハ
至、る、迄、概、一、て、申、す、事、に、一、且、又、旅、店、貸、藏、及、雇
工、船、戸、脚、夫、馬、子、車、丁、等、ハ、人、の、寄、託、を、受、け、官
守、者、に、均、く、其、物、品、を、大、切、ハ、可、取、扱、類、を、申、す、事
ハ、右、兩、種、の、者、ハ、固、よ、り、信、誼、を、以、其、義、務、を、盡

す可記答に以處先般人民保護の爲元年季奉公
の類と制禁一雇人等自主の權を得るに付てハ
従前の如く家長と雖も束縛牽制する事と得さ
るより雇人等心得違と致一家長と視る事路人
の如く之と欺罔一之侮蔑一其財物を盜取る者
之を有るも知る可からず如何となれハ是迄雇
人と責むるの律未だ嚴ふらざると以て家長た
る者束縛牽制して僅ら雇人を使役せざると
得ず此を勢の然らざる所なり然るに今年季

奉公の類を制禁して猶ほ其旧律に仍ると記ハ
雇人等獨り自主の權を得て家長ハ却て自主の
權を失ひ其財物を雇人の盜と取らるるに至る
時ハ其勢ひ復た束縛牽制の弊を蔽一可申因今
般雇人盜家長財物律と改正し雇人等と一を畏
避すると云ふ有りて入ふ事ふるの勢を盡し
家長も亦た之と使役一之に委託するの權利と
失ふ事無く上下兩なら保護と得せしむるの
御趣意ふみ条自今雇人等心得違無之様可致ハ

事

壬申十一月二十七日

司法卿 江藤新平
司法大輔 福岡孝弟

右之通達の趣、竊達条此旨可相心得也

明治六年一月廿一日 神奈川縣權令大江卓

万三ノリ

一 華士族率に據り及金教貸借ハ明治二年
 巳六月郡縣ノ制ニ仰出及以前ノ分裁判
 不及及事

中

一 静岡岡及ヒ仙臺會津ノ外再立ノ藩ニ再立
 以前ノ金教借貸ハ裁判ニ不及及事

一 自今貴賤上下一般ノ人民互ニ期ヲ約シテ金銀
 貸借ニ如シ期ニ及テ不返時内證屢催促ヲナ

スト雖^{やくそくのつきのち}七期月後満五年ニ至ル迄一度モ^{うつぎ}称
出^いサレモハ裁判ニ不及^ふ及^ふ事

但當七月以前之貸借ノ分ハ此限ニアラス

一 従^{これまじりのち}前今後^{このち}在^{このち}家録ヲ引^{このち}者ニ致^{このち}及^{このち}金銀貸借
之後ハ一切裁判ニ不及^ふ及^ふ事

壬申
十月七日

太政官

右ノ通^{このち}ハ所出^{このち}之^{このち}紙^{このち}解^{このち}示^{このち}及^{このち}条^{このち}此^{このち}旨^{このち}可^{このち}相^{このち}心
得^{このち}者^{このち}也

掃^{このち}目^{このち}神奈川縣權令大江卓

ナカノノノノノノ

出

田相定金納之永納東畑之類此れまで迄前貨幣
 呂位高貴之時亦定分方今至米納
おこめうすよくとて之貢額比較はる夫格外偏輕お成り不
 公平元亦年元一般改正之積は仰
 公及桑府縣おわ之增ま稅せ之見はお
 立當十月限租稅寮お可し立事

但税法一般均一有之其操之之法趣意二付
兼之管内之觸示人民疑惑毎之操税
論可致事

壬申 九月十三日 太政官

右之通之仰公在間此旨可相心得也

壬申 九月廿日 神奈川縣廳

此旨を以て仰公に
相心得也

從前之僧官之廢止事

太政官

右之通之仰公之趣觸達之案此旨
可相心得也

壬申 八月廿二日 神奈川縣廳

此旨を以て仰公に
相心得也

江戸川
津原三郎
ニケルニケルニケル

左之通の事

右之通は左之通に別れぬ事

大改訂

新編の通訂の類に非ず

左之通の事
従来神友葬儀の事係不致の如^{いまより}自今氏子
神葬系相頼の事と喪主を助借事
丁取扱の事

右之通太政官の事有觸る事

神奈川縣廳

ナリ



MEMORANDUM DRAWERS

神奈川縣

大分縣

下

此後... 明治六年... 二月廿八日

後前着用之上下... 相慶止更ニ上下

一 般禮儀着用之... 作出る難形

相漆お達は... 明治六年二月廿八日

限上下着用... 礼儀お仕立の中

のお心算

神奈川縣權令大江草

...

二二二二二二二二

新刊書局大正二年九月一日

1000000000

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

1000

遊女奉公或藝妓或食賣女
年期ノ空の身代金請者亦
娘分之名ヲ以其実矢張身代金
請在女者、禮文寫出添九月十五日
限可届出者也

壬申八月 神奈川縣廳

ハ行方不詳
ハ行方不詳
ハ行方不詳
ハ行方不詳
ハ行方不詳

朱書

五月廿日
軒窓三景
Waseda University
Library
2-2-2 Higashi-Tokyo
Tokyo 177 8580
Japan

只此由出也

諸君面之儀
神志川縣
管下と有之
美濃紙墨摺罰紙可相用旨
壬申年
中相達在交中
何之會社と認有之
罰紙或之藍摺罰紙
相用在者も有
之以外
外之事
之友
以來
該類
者
主勿論
會社
入札
兼仕
様帳
其
他
金銀
出入
并
筆
帳
之
類
至
正
一
切
先
般
お
達
在

諸君面之儀
神志川縣
管下と有之
美濃紙墨摺罰紙可相用旨
壬申年
中相達在交中
何之會社と認有之
罰紙或之藍摺罰紙
相用在者も有
之以外
外之事
之友
以來
該類
者
主勿論
會社
入札
兼仕
様帳
其
他
金銀
出入
并
筆
帳
之
類
至
正
一
切
先
般
お
達
在

通之蜀幣相用を推一の致若外幣一
 視差出をせし不取用を間此旨の相簿
 一列幣雜形之蜀幣主當港幣後世
 之者方なる賣買以幸一を間買致しとる
 又主驛村幣後世之者方なる右蜀幣
 務手次身製造錢賣買をせし不苦儀
 各村の便理をまゝに買潤一の中一及且自給

蜀行の相遠なる一なるを不都合とす
 為念を枚を幣一及
 右之通相遠なる者也

明治五年正月廿七日 神奈川縣權令大江卓

又紙と麻は小用ヲ即ち農家利益と獲ル

亞麻仁作付培養方大略

右亞麻仁之儀も歐米玉々多分之小産
る耕耨ハ多し麻糸之製も多し以て町子に
与云フ 野俗ニ 生皮を以て糸と製し生種
實より油と製し人民工用ニ供し生油槽を
以て牛羊馬豚と強健ニする方ノ業用ニ供ス
又紙と麻は小用ヲ即ち農家利益と獲ル

家良の化物と為るもの也

作付季節は秋九月中迄、蒔き

又春二月初旬ころより而して生地

味も多く小麦或ハ麻に適当な地は蒔

及ハ砂利地は雨後凝固する地とも

宜くハ肥ハ糞水とてより候餘

り寧ろ多雪之玉も亦も換室の爲免

枯失之患あり能ハ分保護の事有
せざるべし

且又糸と密なるハ我西之麻を密
る如くして宜くハ生化を人我母精と抽
して工夫を怠るべし

初 農 察

右之通達身弱亦問はる可志得也

壬午九月十日 神奈川縣廳

十月十日 神奈川縣廳

右之通被 仰出之趣觸達條此旨可相心得者也

明治六年四月 神奈川縣參事 高木久哉

口月子、字多々々々

從來訴訟入費之儀と原告被告等

自費或は居村町之費用相成其他人

引合之者等も他人等訟之為自己之職

業ヲ廢シ貧窮之者に至るも家族活

計之道も差響往々難法致し者不

少不都合之次第は自差向今般別紙

規則之通相定公条向後右人費之儀

原被告ヲ論ス一切曲者之^{よけのたの}一身ニ引請
償弁^{アツクシ}可キ事

壬申九月

司法卿江藤新平

司法大輔福岡孝弟

訴訟費償却仮規則

一 身代限諸雜費

臨時計算ニ定ム

右掲載スル處之外臨事人費有之者

其分とも總テ直者之難儀不相成様曲者

より取立レ尤原告被告とも曲直相半

スルトキハ裁判所ニテ双方割合之ラ償ハシム

ヘク且双方亦誤行届タル者各自之費用

ヲ計算シテ欽^クより償却セシムヘシ

訴訟人費取扱方之儀相違ハ處右
来十月十五日施行之政ハ此後亦遵也

壬申九月十九日

司法卿江藤新平

司法大輔福原孝房

尤之通達之趣觸達ハ此等相心得者也

十月五日

神奈川縣權令大江卓

壬申十月十日

年季奉公人ハ解放相成ハ此布告の趣先般觸示
ル嚴娼妓藝妓ニ限リハ事ニ誤解ハものも有之
趣不都合の至ル右ハ娼藝兩妓ハ勿論諸職手間
平常の奉公人ニハとも期年と約シ身代金差出
抱置候分ハ一切は解放の趣趣意候條得共意右
等の趣有之候ハ主當人抱主連印と以引渡
方可届出事
一婦賣いさ候ものハ嚴重の可及所置旨兼て

中

觸示置候處邊隣の街道筋共外におゐて種々
の名を唱へ密に賣姪いたし或は女抱置賣姪
爲致生活候ものも有之哉は相聞不埒の至
候既前条の通年奉公人は解散は相成候
儀付示後抱置候は猶更賣姪等爲致候もの有
之におゐては急度可及吟味候

右の趣觸達候条共旨相心得町村正副戸長共か
ゐて其支配限りの無遺漏取調來る十一月廿日

限りの有無申出べしもの也

壬申十一月九日 神奈川縣權令大江卓

朱書

たりにきりきりきりきり

第百十号

本年第廿五号布告鳥獸獵免許取締規則
 別紙ノ通改正表ニ付各管内へ布達之願出候者
 ハ身元并近傍故障有無取調差支無之規則
 ニ照準免許鑑札相渡屹度取締可致事
 但從前ノ獵銃稅ヲ相廢之第二十八号布告
 銃砲取締規則第六條并發砲ノ儀ニ付戊辰

九月巳巳四月庚午五月中達ノ趣ハ此規則ニ更
換候事

一 従来鳥獸獵差許来候地所ノ字地名共取調
七月迄大藏省陸軍省へ可届出事

但従来許来候地所ニテモ人民障碍相成候
場所ハ更禁止ノ見込取調本文同様可申
立事

一 鳥獸獵免許ノ者ハ新古ニ拘ラス名面取調毎
年十二月迄大藏省陸軍省へ可届出事

一 免許鑑札料ハ收入ノ度毎大藏省へ相納一
ケ年分一人別帳ヲ製シ毎年十二月限り同省
へ指出右總計ハ雜稅帖へ組入歳入皆濟帖ヲ
以成算可致事

一 過料金ハ一ケ年ニ括リ明細仕譯書ヲ以テ司法省

へ可差出事

一鑑札雛形ノ通心得焼印并割印ノ儀ハ在来相用
為見本一枚大藏省へ可差出事

一従前免許鑑札ヲ渡置モノ此規則ニ従ヒ鑑札
改渡税金上納済ノ分ハ下戻更ニ本額ノ免許
料可為致上納事

右之通候事

明治六年三月十八日

太政官

鳥獸獵規則

第一條 銃砲ヲ用テ鳥獸ヲ獵シテ生活トスル者ヲ職獵トシ遊樂ノタメニスルヲ遊獵トス

第二條 銃獵ノ事自今免許鑑札ナキモノ一切禁止シ有害ノ鳥獸ヲ威シ或ハ殺スハ地方官ノ便宜ニヨリ臨時ノ免許ヲ與フヘシ

第三條 職獵遊獵トモ必ス願書ニ名住所身分

年齢ヲ記シ地方官廳へ願出免許鑑札ヲ受シ出獵ノ節ハ必ス之ヲ所持スヘシ

第四條 獵鑑札ハ一人一已ノ用トナスヘクシテ只一年ノミ効アリトス

但毎年十月ヲ以テ鑑札ヲ改メ渡スヘシ

第五條 鑑札ヲ渡スニ職獵ニ壹圓遊獵ニ十圓ヲノ免許料ヲ納ムヘシ

第六條 鑑札ハ各地方廳ニテ別紙雜形ノ通製
造シ相與ヘ尚翌年モ願出ルモノハ最前ノ手續ヲ
用ユヘシ

第七條 鑑札ハ借貸或ハ賣買スルコトヲ禁ス

第八條 鑑札ヲ遺失スル者及遺失セル鑑札ヲ
拾ヒ得ル者ハ直ニ管廳ヘ届出ツヘシ

但其遺失セシ者ハ印鑑遺失例ニ照スハシ

第九條 左ノ輩ヘハ鑑札ヲ與フヘカラス

- 一 十五歳以下ノ幼者
- 一 獵銃用コ方ヲ知ラサル者
- 一 白痴風癲等人事ヲ辨セサル者
- 一 故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受ケシ者
- 一 山林田野川澤等ノ監守者
- 一 獵事ニ関スル諸規則ヲ犯シ前刑ノ言渡ヲ謹

守セサルモノ

第十條

左ノ場所ニ銃獵スヘラス

一 人家稠密ノ地距離三丁以内

一 假令郊外ト雖モ銃九ノ近リテ人ヲ害スルノ恐レアル所

ル所

一 禁獵制札場所

一 他人ノ住居或ハ柵橋等ヲ以圍ヒアル場所

第十一條

獵銃ハ和銃四匁八分五以下ノ小筒并西洋

獵銃等併セ用ユ可シ軍用小銃ニテ鳥獸ヲ獵スル

ヲ禁ス

但獵銃ヲ所持スル者銃砲取締規則ニ照準

スヘキ事

第十二條

獵ヲ禁スル地ニ非スト雖モ田畑植物ヲ踏

荒シ且樹木ヲ毀損スルヲ嚴禁トス

第十三條 銃獵期限ハ十月一日ヨリ三月三十一日迄ヲ
限リトス右時限ノ外ハ出獵ヲ禁ス

但銃獵期限ハ地方ノ摸振ヨリ其見込
ヲ以テ此期限ヲ伸縮シ山間等人家遠
隔ノ地ハ其期限ヲ定メサルヲモアルヘシ

第十四條 戸長邏卒地主山林田畑川澤等ノ監守
者銃獵者所持ノ鑑札ヲ檢査スルノ權アルヘシ若シ

檢査スルヲ否マハ無鑑札ノモノト見做スヘシ而シテ此
諸規則ヲ犯スモノハ右ノ輩申立ニ據リ其罪ヲ論ス猶決
シ難キ時ハ證ハテ以テ證スヘシ

第十五條 犯人アリト雖モ之ヲ即時ニ捕ヘ又ハ其獵具
ヲ直ニ取上クルニ及ハス犯人ノ鑑札ヲ所持スルモノ其
番号姓名等ヲ取調申立ヘシ若シ鑑札ナキモノハ
其姓名住所ヲ聞糾其犯人ニ同行シテ其本宅ヲ認

△へシ若犯人其面ヲ隠シ又其姓名ヲ告ケ肯セス且
住所本宅知レサル時ハ最寄ノ役所ニ伴ヒ其身
上ヲ聞糾スヘシ

第十六條 銃獵セシ者ノ為メ其官廳へ出訴ル時
ハ右出訴ニ属スル入費其不理ナリト裁判ヲ受ケルモノ
ヨリ出サシムルコト一般ノ公布面通りタルヘシ

第十七條 凡テ再犯以上ノ罰金六倍ニ取ルヘシ

但罪ヲ犯シタル時ヨリ十二月内ニ此諸規則
ヲ犯スモノヲ再犯トス

第十八條 此諸規則ヲ犯スニ詐譎脅迫ノ舉動アル
者ハ本律ニ因リ從重科断ス

第十九條 此諸規則ヲ犯スニ由リ他人ニ損害ヲ蒙
ラシムル者ハ之ヲ償フ可シ

第二十條 何ノ罪ヲ問ハス此諸規則ヲ犯スモノハ鑑

札ヲ取揚ケ本罪ヲ科ス

第廿一條 免許ヲ得スレテ獵スル者ハ五圓ヨリ不少
二十圓ヨリ不多罰金ヲ出サシム

第廿二條 此諸規則ヲ犯シテ獲タル鳥獸ハ之ヲ取
上クヘシ

第廿三條 鳥獸ノ死シ或ハ落酔スヘキ餌或ハ藥品ヲ
用井テ獵スルヲ禁ス

一 從前土地之恩倍ニ因リ旧慣を私法ニ事

及親間ニ有之式々祖先之代々召仕在者

地石を附與致一在分生子孫ニ至ル迄家

抱杯と唱一家來回探と扱ひ致一一村之者

回嘗ニ見傲さす式を他より入村する者

水吞と唱一是又回嘗と交り不致ホニ親

間ニ有之人氏恨和交際之道ニ未及

在間原旧習志の家格あり候可
令禁止事

一古来荒蕪之地と拓き一村と成立有
是と村分々号々舊家多る取心他人
輕蔑致し候非儀之舉動致し有
有之趣最之祖先之切續之誇り今日
取他人と凌ぐ盛き之理無き間自今

右之唱令禁止暴慢之不業致し
事

一農業之傍高業を有管及儀林禁止致
及向有之生取自今務多る盛き
事

一人氏不持地取之中自他之都合あり池
沼川溝ホと堀刻或道路を付替致し

儀儀目今目今強強るるに強強く立立指指揮揮を更更に強強くす

一 各強各強して社寺社寺地蔵堂地蔵堂稻荷類稻荷類創立創立強強く儀儀

從前從前之通之通林割林割多多く強強くす

一 人瓦人瓦所持所持耕地耕地地畔地畔強強く壇壇遺體遺體を

埋葬埋葬強強く一一方方有有之趣之趣以外以外之事之事に

自今自今可可有有嚴嚴林林未未事事

一 河岸河岸強強く儀儀新規新規未未設設儀儀差止差止儀儀

向向右右自自之方之方自今自今強強次次弟弟吟味吟味之之上

可差可差許事許事

一 不定不定地地年年期期を定定り別替別替強強く一一方方向向

向後向後持持主主未定未定可可し之事之事

一 田畑田畑勝勝儀儀之儀儀既既に去辛去辛未八月未八月迄迄差許差許

有有之儀儀高高漸漸米化米化と減減一一桑茶漆桑茶漆

橋橋土土地地未定未定可可し之事之事牛馬牛馬羊羊

三
之牧蓄ホ常ニ心拭充分物産繁殖ノ
方法可ホ立事

但進々分國ナリ羊未會歟類觀
農案ニホ集共上分配試驗可

右ノ條件皆轄内各道漏ラホ觸可

右ノ條件皆轄内各道漏ラホ觸可

主申 八月毎日 大藏大捕井上啓書

右ノ道は遠之極届達案此旨可ホ心
得也

主申 九月十日 神奈川縣願

朱書

丁卯年正月...

第三拾号

生糸製造人名前一村毎に書出る觸示置以上六人別
書出可しと勿論之廢村之内を製造人五人或は之
人二而壹人之名前ニ被レ書出様り合は者も有之由
不將之至は右件ノ傷之儀書出おろく其外ノ人
勿論戸副長迄吟味之上及沙汰不可有之旨將
遠致之間爰以此段相違也

朱書

明治六年四月八日 神奈川縣參事高木久成

一、
二、
三、

第七十号

身代限申付

各所へ揭示日数ノ儀三十日ト

申第百八十八号布告ニ及在處詮議ノ次第有

之六十日ト改正在条此段更ニ相違在事

明治六年二月子音

太政官

右之通知仰出ニ趣觸違条此方可也
此の也

明治六年三月廿日

神奈川縣參事高木久成

三、
二、
一、

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or reference.

豐善貴言 軒奈川總卷車高木又為

右以圖記法之雜圖直表其法也

開卷年二月十日 太妃官

六六十月十日五為茶地題更時重為車

壬申歲百八十八年也亦皆三又亦為結精之次第

復次朝申女為前各河入縣示日幾三十日十

黃子十也

雛形

神奈川縣下

武藏國何郡何村

國幣何之神社

旧社人官

何之推印

一元朱印地社領何石之内配當何石

一元神主社人之別當社僧之實子相續の

復歸之之祝或平民之財之神
相親友之巨神・禊心魚
一曰幕時代・獨祀序之百年始由獨敘來
亦之家智雖目之社奉行亦之月
巨印五記以魚
先祖何之誰何年月日神古亦別者
之補之以來何十世世襲神勅者代誰

何年何月何狀有變又之復歸敘
昔何賦有命敘一者在
以上

右之通在遠各口座在以上

右村戶長

何之誰印

朱書

二月廿八日
由信書在調為月廿八日迄其區之長
差公區限在經二月四日各在遠差左出
可中事

今般旧神古編藉之儀二月而調之
筋有之三月別紙雛形見合銘之
由信書在調為月廿八日迄其區之長
差公區限在經二月四日各在遠差左出
可中事
右之題得之意區内旧神官各遺漏
通達列紙情平刻日之上順達留

區より一町返生也

明治二年二月十日 神奈川縣權令大江卓

北海道開拓創業以來募移自移ノ
徒日月ニ増加今日ニ至リテハ運漕行旅
モ不便トセス然ルニ元ヨリ曠莫ノ地ナレ
ハ肥沃多産ニシテ廢棄スル者猶十ノ
八九ニ居レリ因テ今度全道間曠ノ
地低價賣下緩期除租等ノ規則
別紙開拓使布告之通施行セシムル

條墾闢牧畜或ハ漁獵採鑛都テ
生産興工ノ志願有之者ハ同使へ可
申出事

壬申九月 太政官

右之通被 仰出之趣觸達奈此旨
可相心得者也

壬申十月^{廿七日} 神奈川縣權令大江卓

北海道土地賣貸規則

第一條

原野山林等一切ノ土地官属及ト從
前拜借ノ分目下私有夕ラシムル地ヲ
除クノ外都テ賣下ケ地券ヲ渡シ
永ク私有地ニ申付ル事

第二條

賣下之地一人十萬坪ヲ以テ限リ
トシ下手後十ヶ年除租タル可シ
尤モコニ私有シタル地ヲ相對賣
買スル者ハ其坪數制限ナルヘキ
事

第三條

賣下ノ地價上等千坪一圓五十錢

中等同二圓下等同五十錢千坪以下
其割合タル可ク且其地代即納タル
ヘシト雖モ家産中人以下或ハ罹災
窮乏ノ者ハ三年乃至五年賦上納
申付ル儀モ可有之事

第四條

既ニ私有スルノ土地ハ牧畜開墾等

一切ノ産業ハ勿論他人ニ賣却スルモ
其地主ノ自由タルヘシ尤モ右等下手
スル節ハ水利運便等ノ上ニ注意シ
其方法及セ期限等詳細ニ可申出事

第五條

人民私有ニ屬スル土地ト雖モ外國人
ヘ賣渡シ或ハ之ヲ引當トシテ金子

ヲ借受ル等禁止ナルヘキ事

第六條

土地買下ノ後開墾其他共上ノ地ハ
十二ケ月中ノ地ハ十五ケ月下ノ地ハ二
十ケ月ヲ過キ不下手者ハ上地申
付ル事

第七條

除租滿期後ノ制程ハ追テ其地ノ
差等ニヨリ適當ニ可相定事

第八條

採鑛漁獵等都テ生産興工ノ見
込アリテ出願スル者エハ其方法取
調年限ヲ立貸地等ニ差出シ稅
則ハ出品ノ精粗多寡ニ隨ヒ追テ

適當ニ可相定事

但諸鑛山脉理等ノ甲乙ハ查了
シテ可公布事

第九條

右等諸工業ノ新發明或ハ水陸運
便等ニ費財盡力シテ國家人民ノ利
ヲ興シタル者エハ其功業ノ大小輕重

朱書

二因リ若干ノ土地ヲ付與シ或ハ專賣
除租ノ榮刹ヲ與ル等ノ処置可有之事

右之通候事

壬申九月

開拓使

キリシキテラシク

人の生るや無知あり。父母之と教育し其知覺の稍々開
るふ及んでハ之ガ師を撰ニ文字と習ハしめざるハ
文字ある者ハ名稱を記シ言辭と叙ベ事物の道理と著明
し之ヲ依リ倫常の重き成知り是非の別ちも出て自ら知
覺と増進者として家業と營むも交際と能はるも皆之
と假らざるハ必し其心用ある此の如し故ふ通邑大都
は彼邊陲窮郷に至るまで習書師ありて童蒙に教授せり
抑も此業や成近の事似多れども實ハ天下の子弟たる
者の賢愚智闇は關係はる所萬民教育の基礎とされバ其
責ある極をて重大と謂つべし然る小從前弊習の多き生

徒ある者、柴ね半途よりして、迂遠の學問に趨り、利口は高、大無根の説と唱へ、畢竟實用に切からば、或ハ又貧民の子、弟固より學資を乏しく、且學ぶべき工夫も、あらば、無知、文盲より一生を暮し、中ハ罪科を犯し者、何に至き、誠不歎ふしき事共あり、今や生れて、文明開化の潮流に遭値し、猶斯く無知や、迂遠にして、空しく、淵隙を過ぐし、れば、何の世より國家の恩を報ひ、何の時、人道の務を為さん、況して、各國交際の親睦ある時、ふれば、我國の民として、今日之急務は、勉勵せざるを得んや、是より於て、今般當縣管下、普く習書師を、告示し、文部省小學の規則を、模範し、以て子弟

と、教導し、以、術を、長育する基本を、為さしめんと、從來生徒の謝儀等、甚と菲薄にして、其師あり者、活計も不利なれば、間々廢業せる者あり、是等ハ、最も注意周旋せむんば、可うら、匠就て、ハ管下市街鄉村の各戸子弟の有無を論ぜむ、身財多寡を、隨ひ、毎戸錢鈔を、糾募し、其全額を、戸長或ハ其所管の課長にて、總轄し、規則を、定立して、之と各地の習書寮に、分付し、生徒の束備謝儀、及び筆墨諸般の死費を、充つべし、然れば、富有の者ハ、格別々の寒貧の子弟と、雖も、聊も學資の憂慮なく、凡て男女七歳以上より、皆入學せしめ、猶餘財あらば、要用の書籍を、購ひ、讀まん、と欲する者

小ハ借覽せしむべし此の如くかれハ貧賤富豪の差別か
 く各々其知覺と増進し其志願と成就し之を大にして國
 家の恩ヲ報ひ富強の術を施し皇威を萬國ニ誇耀し之を
 小にしてハ生活の業を理し或ハ貿易何ニ由らば利益の
 道を開き其身幸福子孫榮昌からん是皆智力有りて然る
 後之と能まべし人の父母多る者誰々其子の此の如き成
 欲せざらんや且其子無き者も夫々の義務おして苟も國
 家ニ益ある事ハ必を鞠窮して為らばきかれバ管下一同
 何も此旨趣を認得し勇為進取し開化進歩の好機會ニ
 後々勿れ

附

本文の外別ニ犬上縣の布告ヲ附
 合せ見て其意と了解せしむ

學制の儀は付今般御布告の趣あり有之候は付左は通管下
一般の規則相立候間其旨相心得座候尚巨細の儀は一
同熟議の上伺出べし事

第一則

一 大區は學區取締一人設置し區内學務を總轄せしめ
候事

第二則

一 従来の筆學所は一切廢止せしめ其師多し者ハ試験の
上擧げ小學舎に教師と爲
但試験の節ハ官員師範學校へ出張検査し候事

第三則

一 小區は小學本校一ヶ所を置るし若し地勢阻遠りて不便ありきハ便宜に支校を置べき事

第四則

一 當分の内師範學校設置き生徒二十歳以上身持正しく略筆算の志せし者を選り師範學校に入すべき事
但師範學校の位置ハ遠く達はるべき事

第五則

一 師範生徒入費ハ区内より差出ればきまものと心得れば然れども成丈高持の子弟等を選り以て其費用を自ら辨せ

一 び び 事

第六則

一 小児七歳は相成候りて男女の別なく其近傍の學舎に差出ればるべき事
但七歳は相成候りても病氣其外止を得ずる状情ありきりて小學所に差出ししむる令ハ其旨巨細戸長へ届出るる

第七則

一 女子の儀も當今の時勢に對し無學に生育あり候き實に恥べき儀に付男兒同様小學所に差出べき事

第八則

一 學課を五級に分け一級毎に授業六ヶ月を限り六ヶ月
に至り試験の上昇進に依り若し此月數卒業し及ばざる
ものは尚六ヶ月間教授に付き事

第九則

一 別紙學課修業中餘暇を以洋學或學候儀ハ格別ニ候一
らば表外の漢籍に類たりし讀むを候儀ハ相成らざる事

第十則

一 第七月一日より第十月三十一日迄ハ毎午前七時より午
後第二時迄十一月一日より六月三十日迄ハ午前第八時よ

り午後第三時を教授に付き事

但暑中ハ午前第五時より第十一時迄教授致し事

第十一則

一 午前第七時より第九時迄習字第九字より第十一時迄
讀書第十二時分第十二時迄晝飯午後第一時分第二時迄
復讀第二時分第三時迄算術教授致し事

但十一月より六月迄ハ本文ニ準り暑中ハ其時間を追
て授業に付き

第十二則

一 夜學生ハ午後第七時迄ハ出頭第七時より第八時を
習字第八時より第九時迄讀書第九時より第十時迄算

術教授のしるべき事

第十三則

一 春秋兩度生徒大試業高料の者と三等より褒賞し
て相應の品物と與へ申上る事

第十四則

一 毎戸子弟の有無に拘らず有志は者より資費を募り
右集金とありて學舎教授書籍等の費用に充てし事
但右取經方ハ區長戸長より萬端取扱申すべき事

第十五則

一 父母貧寒より家業世話し又ハ勤仕等より晝間積

古成のしるべき事ハ夜學のしるべき事

第十六則

一 月謝ハ一ヶ月金壹米歟又ハ白米壹升其外七月十二月
ハ金壹分づつ納むべき事

但有福の者ハその志に任せ謝禮指出候儀勝手た
るべき事

第十七則

一 貧乏の月謝又ハ筆墨紙等調へべきことの戸長より薦
め取亂し事情相違ふをなくば相當筆墨紙と與へ修業以
るべき事

第十八則

一 學舎ハ追テ新築致シ居キ苦キも先當分最寄リ寺院又ハ手廣の家宅を借受リ事其区内の便宜ニ任ル

第十九則

一 生徒の増減或ハ等級の昇降等毎月製表シ差出申事

第二十則

一 休業ハ

一月十日	同十三日	同廿五日	同廿九日	二月二日	同廿日
三月十日	同十三日	同廿五日	同廿九日	三月二日	同廿日
五月十日	同十三日	同廿五日	同廿九日	五月二日	同廿日
七月十日	同十三日	同廿五日	同廿九日	七月二日	同廿日
九月十日	同十三日	同廿五日	同廿九日	九月二日	同廿日
十一月十日	同十三日	同廿五日	同廿九日	十一月二日	同廿日

右之通可相心得者也

明治六年二月

神奈川縣權令大江卓

副校長 手習師匠

夫上縣より管下の人民へ諭告せし文は曰

斯る有難き御代に生れながら遊惰又安んじ無智文盲にして空しく月日を送るハ第一御上の御恩を忘却し刺家業繁昌子孫長久の道に暗き譯して人と生れある甲斐も形く歎クハしき事候追々告諭せし通此度小學郷學取設け管内四民一統男女に拘らば修行せしめ度就てハ每區一校縣下九拾一小學取造致し度されども即今手始めの事分れハ俄に充分に至り難き場合も有るべし當分每郡小學本校一箇所支校二三箇所乃至四五箇所計地方の便宜を以て取設くべし尤即今より本校數箇所建

營致し度願出候向ハ評議の上沙汰及ひ候品もふきわ
 了べく然る所郷學ハ人民共立の學校として官費を仰ぐ
 べき筋ありれバ郡總代町年寄戸長其外都て郡町從前の
 者共速申合せ有志の輩を募り費用永續の目論見と立
 て來八月十日迄見込の筋逐一縣廳へ申出べく六郡の申
 出書面相揃候上ハ衆議を斟酌し一定規則方法を布告せ
 べし右郷學取設は付てハ長濱高官の如きは速に廳旨を
 體し既其端緒を開き其他追々目論見等と差出しある
 村方もおき共此度一定の方法相立候に付てハ尚又此
 の節精細相認め一區限り更に申出づく候然るは是迄

仕入り家業さ勤め候へバ相濟事をもべきに萬一學問
 上達の子供出来せば忍ち身代を持崩し一家一族の厄書
 容易からん然るに上より學問せよとハ實に無理ある事
 あり其上右に付出金とハ此上もあき非道とて動もせれ
 ば廳旨を誤る愚昧頑陋の徒も有之哉聞へさへて歎
 しき事共候然ながら從來學者の中にも一生涯書籍の
 心力を盡し口は高大無邊の道理を説き道學先生と
 唱へ又ハ詩賦文章を仕事として筆ハ花を翻え如く巧
 綴りて風流才子と稱せれども放蕩無頼にして一身一
 家の上も衆人の罵詈を受け日用の事ハ庸人よりも劣り

國の道は迂遠にして世の用は立ざる者も間々ある故學問と申せば強て讀難き書物を讀みて右様の真似を事と存せざるも盲昧の下方なれば無理からざる事あり然らば此度取設けの學校ハ右等の事を學ばせ候ハ絶世之課程規則ハ追て相違をなく候得共差當り申せば手習十露盤請取證文の認め方日用取遣りの文通三枚の御高札當國郡村の名府縣の名稱歴代の年号和漢洋治亂沿革の大略其外日用知らばして叶ハざる庶々より人の入る道と知り身家と修齊し職業と繁昌し子孫を長し其才徳次第一此度志とる官員も撰バこづき基と

養ふ祐かり其意ハ福澤諭吉著せし學問の勸めと同様の譯かれバ今般九十一區へ右の書物二部づ配賦し及び候條役前の者ども熟讀して小前未々まで心得違ひおき様精々誘導にべし尚又郷校取設けに付取立候米金ハ勿論僅一錢あり共上の費用に相用候儀ハ更無之候間其區内從前よ於て萬端取締致し請拂ハ勿論貸附方等も規則を立永續の手段を盡まべし右積立米金の内を以てハ鰥寡孤獨廢疾等都て區内の窮民を賑恤し又ハ天災地妖非常教育の手當とかし又ハ隣區郡の差置難き難澁有之節は有無を通じ憂樂を共よし子孫永久睦しく暮し

方相成候様一種の良法と説べく。必竟民間共立の便を以て各其所を得て共々全國の太平を保護し奉らんと欲するあり。尚又小學開校の上ハ役前の者申合せ時々罷出子弟の成立方ハ勿論都て村方の利害得失を考一御上の為め能々萬事集議の場所ともおし。縣廳より布告等も同所へ相達走べく。付會得致し難き事ハ教官へ相尋ね。又ハ區内身持不束の者郷校へ呼出し。役前より申諭し。尚も合點致し兼候づく。教官より懇切に誘導せしむべし。又或時ハ縣廳の官員出張下々の情實を聞取り。子弟の勤惰を考へ。村不へ告諭等も此場所にて取扱ふ事も有之べく。就て

ハ一々郷校出来して萬事都合よく村方の仕合も多り。一し。熟視し御一新前の景況華族士族の家は在れ。不才無智にして役義勤より兼て病身弱體にして戦場の働きも叶はぬ。治亂其職掌立とさる者矢張高禄を食し。遊戯酒食。日を送り。中々儘廉耻を知り。退きて農商の業を營んと欲するも才智勝れて天晴かる人物ありとも。表立多る役人にも成難はれ。志を吞て朽果外手段もかりしが。有難き今日の御政體は相成りてハ。華族士族の身分ありとも。其器量か。れ。自分存付の儘農商の業勝手は營ま。如何程下賤の匹夫ありとも。天質正直にして學問は達

し。世の益はる人なれば。何時より朝廷の官員とあらん。勅任奏任等。尊貴の御役も其才徳次第。匹夫より登庸の道を聞き多るハ。誠は前代未聞の有るべき事ハ。無之哉。斯る逢難き御代ハ生れるがら。學問せざるハ禽獸も劣るべしと考へて。御國恩と知る有志の者下々おゐて申合せ。取設りなす共立學校他の府縣諸所ハ出来ず。近く京都府の如き。既に先年取設り相成上下西京の小學。總計六十四校。學生男女合て一萬五千百六十八人。尚又當節其管下十一郡一過く創建し及べり。實ハ盛んかりと云べし。往々此度有用の才の輩出で。遂ハ匹夫より尊き官員と

登る者も有之べく。譬ハ官員と成らざるも銘々道理を辨へ家職ハ賢く商法正路ハ相成り。都て風俗一變し。他日繁昌の有様今より想ひ見れば。然るに當縣ハ。纔ハ拾八里の隔りよて人情好惡の不同ある今日ハ至り候ても。尚學校取設を無益とみ。縣廳の説諭を否。舊來の因循ハ安んじ。其日暮しハ光陰を費し。同じ人間ハ生れながら。二十の後ハ遂ハ都人と賢愚別黑白の如く。富貴貧賤の相違ハ雲泥より甚しく。永く世の嘲りを招き候様相成候てハ。氣の毒千萬ハ之をなきや。就てハ町役人ハ申し及ば。小前未々まで趣意を味ひ早速相談期限相違なく申出づべ

く尤下々不同意の義を無理に押付候譯ハ毛頭無之心得
難く存候。用捨かく幾度も其次第逐一申出べし能
逆説き論せべき旨管下一同一布告ありたり

平

當港外國人居留之為貸渡在地取と
此國人と對ニ而外國人より借受又と讓受
家作賃借致し儀と難事証を從前
之規則より右様之儀とあり之旨發表せし可也

第一の得遠之ものありて於てと嚴重に可
及少休を以て得遠無之採可致を事
右之通觸示す也

神奈川縣廳

七月十五日

寄留旅行之者鑑札之儀ハ去辛未七月
中被廢止ヤウケイ在その各學務廳又ハ不役人ハ
徑前渡來ニ其鑑證書ハ其位差置ハ
向ハ有之跡ハ不鑑無之者ハ行旅ハ差支不部

相栄

合之趣 ことまじ 申す事 ことまじ 以後 ことまじ 從前 ことまじ 後來 ことまじ 分る事
廢 やの 一 各 各 不 不 違 違 行 行 不 不 違 違 事 事
右之通 太政官より所達之日 簡示也

壬申 神奈川縣廳

七月十九日 太政官より所達之日 簡示也

僧侶之位階自今社廢停其事

明治六年一月十九日 太政官

右之通被 仰出之趣 簡達 衆共可相
心得者也

明治六年二月十日 神奈川縣權令大江卓

二〇〇〇年一月十九日

朱書

M. A. A. M. A. M. A. M. A.

明治六年二月十日
林念川總勸令大臣草

心別表也

方之圖說 各以之權能其其首可時

明治六年二月十日 大臣首

論以之論其自之出論其出也

第八十八号

僧侶借滞出入身代限規則充之通相定其案

此為未達其事

明治六年三月五日

太政官

僧侶身代限り規則

抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一 食料

寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥トシテ外雜穀
ハミ升五合尼及婦女幼女ハ四合麥ハ八合雜穀
ミテ外ニ合宛一ヶ月間用フル飯米ヲ残シ置クヘキ事

一 建物

法用ニ必要九箇所
つとめ

但本堂と建添とトモ榮耀と辱スル箇所ハ此限

リ、アラズ

一 寄附帳之記載せる部
分

一 什物帳之區別シテ記載せる古來傳承の寶物
法用ニ必用ナル部
分

一 法衣 寺主並
住持及尼共 各一通宛

一 時服着替共 寺主並
住持及婦女共 各一通宛

一 夜具 寺主並
住持及婦女共 各一通宛

一 鍋釜及炊具類 各二
通

一 本人職業と為る
必要ナル金額五十兩
至止
の物品と
多保く
も其他
の方去
ハ華士
族平
民身代
限り
に同し

右之通り
仰出
之趣
觸示
奉此
可也
得也
也

朱書

明治六年四月五日
神奈川縣參事 高木久城

口口口口口口口口

第百二号

是迄八十八家百家之者へ祝券金被下付交
當年限廢止此條此旨相違於事

明治六年三月十三日 太 政 官

右之通被 仰出之趣觸達奈此旨可相違
者也

朱書

明治六年四月音 神奈川県參事高木久成

以下は左の如き事なり

金子受取金銀貸借地所賣買契入
書入者替請負諸約定凡人民互に諸
體文手形親書月類ヲ以後日ノ証據ト可
較品ニ付テハ自今別紙規則ニ通相心得
各其書面印紙ヲ貼之取引可致依テハ
本年六月一日ヨリ以後ノ證書ニ右印紙無
之ハ後日訴訟取揚不相成事

但^レ印紙ハ大蔵省ヨリ可^レ取^レ渡^レニ奉^レ各^レ府
縣^ノ管^下適^宜ノ場^ニ於^テ為^ス賣^捌一^ノ申^事

明治五年二月七日 太政官

府縣

一 今^レ度^ニ金子受取金銀貸借を始^メ本年六月
一^日ヨリ證書^ヲ用^テ及^テ前^ハ印紙^ヲ貼^リ取^引
可^レ改^告也 仰^出及^テ付^差向^テ別紙^ノ負^數ヲ通
印紙相渡^及條^ヲ於^テ管^下適^宜ノ場^所賣^捌
所^ヲ立^止及^テ支^振可^レ改^注意^事 尤^モ一^町一^軒宛
賣^捌所^ノ候^ハ人民^ノ身^元慥^ク者^ニ及^テ誰^レ被^レ

不^{えん}論^の望^ど必^ぎ第^だ差^さ許^あ不^ふ苦^く尤^え公^{こう}然^{ぜん}戶^こ外^が之^の印^{いん}紙^し
 賣^{えん}按^{あん}所^{じょ}之^の看^{かん}板^{ばん}を^を掲^かげ^けし^しむ^む厚^{こう}き^き事^{こと}

但^た免^{めん}許^{じょ}之^の上^{じやう}看^{かん}板^{ばん}を^を掲^かげ^け及^{およ}者^{しや}之^の外^が一^{いつ}切^{せつ}印^{いん}

紙^し賣^{えん}捌^{ばつ}ふ^ふ成^{せい}事^{こと}

一 印^{いん}紙^し之^の差^さ等^{とう}左^さ之^の六^{ろく}種^{しゆ}之^の有^あ之^の各^{かく}其^{その}定^{てい}

價^{げん}を^を以^も為^な賣^{えん}捌^{ばつ}下^か事^{こと}

淡^{たん}黑^{くわい}色^{しき}印^{いん}紙^し 定^{てい}價^{げん}一^{いつ}錢^{せん}

橙^{てい}黄^{わう}色^{しき} 同^{どう} 五^ご錢^{せん}

紅^{こう}色^{しき} 同^{どう} 十^{じゅう}錢^{せん}

黄^{わう}色^{しき} 同^{どう} 二^に十^{じゅう}五^ご錢^{せん}

綠^{りく}色^{しき} 同^{どう} 五^ご十^{じゅう}錢^{せん}

青^{せい}色^{しき} 同^{どう} 一^{いつ}圓^{えん}

一 印^{いん}紙^し定^{てい}價^{げん}之^の極^{ごく}置^ち及^{およ}得^{とく}共^{こう}賣^{えん}捌^{ばつ}以^も者^{しや}之^の定^{てい}價^{げん}
 四^よ分^{ぶん}引^ひ 即^{すなは}定^{てい}價^{げん}百^{ひゃく}圓^{えん}を^を賣^{えん}六^む代^{だい}價^{げん}と^と拂^{はら}渡^{わた}事^{こと}
九十六圓也

但後金上納不苦及事

賣捌所のおつて、印紙買取及人名年月日附

明細お記の一益の様堅く可中付事

印紙を用ひする約定換書の類を受取書の

外十圓以下は換書款に相用ひの界紙の分の

各府縣のおつて其土地有合の生紙の濃紙の大寸

久の適宜の標用の廳中のおつて離形の如の

木板彫刻の以の印紙賣捌所の於の存賣捌

可中事

一 界紙の元代價招工等の總高の割の加の圓の即諸費百

十圓の定價の賣捌及者の右一割の四分引の即定價

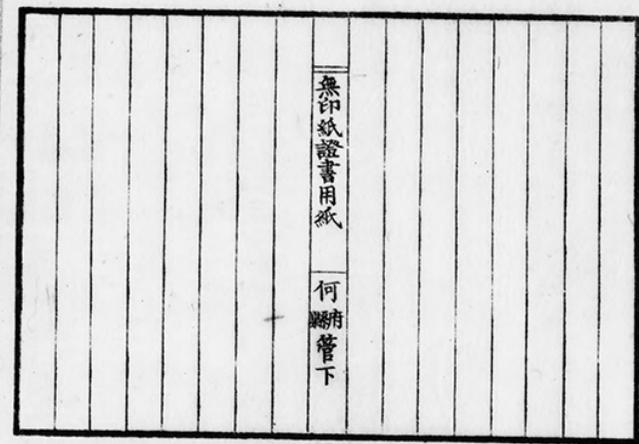
百圓のを以可拂渡事

一 界紙元代及其一割の四分の賣捌料のを引の残り六

分の即定價百十圓の管轄廳の收入の一の年分の取束

大藏省へ可相納事

界紙離形



受取諸證文印紙貼用心得方規則

第一條

一 自今金子受取其の諸證文手形者、張付の印紙の發行に際し、民間之信義を益堅固あり、めんとの内主意を都て受取證文等、後日之証授きて取置りの及得、最初取引の前紙の後末を慮り、苟も森略之事、何んがうらむる

等之及受往之最初之漏子速留より遂之ハ公之
裁判をも願ふ事有る之或る者有り交際上之信
義を失ひ公裁を煩ハ一且一身之控おも生罪を
得る者容易ありたる場合之立到及ハ不お濟事
事之ハ宜初より能く其信義を固ク一之を盡
を蘇異之せざるの証として必之と印紙を貼用
して取引改ま一抑此印紙を貼用する時

ハ双方相對而已して取極め一事と雖も公之印
信を表記して其約定之堅き事を證する意と
念得を原と事

第二條

一 印紙を貼ま之証書類分て二類と也
第一類ハ金言之拘はる都也一極く印紙を
貼ま之者假令ハ

金子其分借受取

借品賣買辨受取等
同形

借會社入金子形

仲間割合證文

わらわさしあつた
跡式讓狀

に
荷物送狀

右何事も金言に拘りて十圓以上八都

一錢印紙を貼用する事

第二類ハ金言に應じて次第に印紙を増す

厚き者假令ハ

借用金證文

たか
田地屋敷建家賣渡證文

ま
質地證文

り
流地證文

るせ
為替手形並行為替手形

質入借用證文

請負手形

金子類ノ證文

諸切手類其外

右何れも十圓ニ充テる分ハ印紙ニ及ハテ十

圓以上ノ其金言ニ在ルテ悉皆印紙を

貼用ニ改事

第三條

一 印紙ハ書面を讀ミ方ニ貼用可改事

一 凡金言十圓以上ノ諸受取諸証文若印紙等

之係受取直及リノ後日如何係之故障難

題差起及テ一切取揚無ク事

但十圓以下ノ分ハ此限ニ付ラズ

第四條

一 印紙の定價は通り所^{きよば}在賣所^{うりば}に於て賣捌
及^お付印紙を用ひ者^{もの}ハ最寄賣所^{ちかひうりば}に於てお求^{もと}め
定價代金お拂ふ^{まはら}べき事

但官許賣所^{くわんきよば}に非^{あら}ずして印紙買取^{いんしちかひと}り
る曲事^{まがこと}事

定價

淡黒色印紙一枚 定價一錢

橙黄色印紙一枚 同 五錢

紅色印紙一枚 同 十錢

黄色印紙一枚 同 二十五錢

綠色印紙一枚 同 五十錢

青色印紙一枚 同一圓

第五條

一 書面金言十圓以下は受取^{うけと}りを除^{のぞ}くお給^{たま}ふ

界紙を用ふ厚一界紙ハ印紙賣控所之控印
為賣捌品之限リ左条右界紙ニ付ル分ハ
後日故障若起ルモ左揚母ニ事

但文取書ハ界紙ニ不及事

一 凡約定證書教金限之拘リテ分假令
養子情状奉公人信状之類ハ皆界紙を用ふ
厚一界紙ニ付ル分ハ前同左揚母ニ事

第六條

一 第一類之諸受取書會社入金子形等ニ付即
第二類之證書教印紙貼付之多寡左ノ通ニ
左事

書面之金百十圓ニ付ル分ハ印紙を用ふ

及ハ左 界紙を用ふ

書面金百十圓以上 淡黒色印紙一枚 即一錢
二十圓ニ充ル分ハ

書面金字二十圓以上
三十圓充するは

淡黒色印紙二枚 即二銭

同三十圓以上 同 三枚 即三銭

同四十圓以上 同 四枚 即四銭

同五十圓以上 橙黄色印紙一枚 即五銭

同六十圓以上 橙黄色印紙一枚 淡黒色印紙一枚 即六銭

同七十圓以上 橙黄色印紙一枚 淡黒色印紙二枚 即七銭

以上右に準ずるは十圓を加ふる毎に一銭宛を増す

百一十圓以上 即百圓より百九圓九拾九銭と六十銭

紅色印紙を一枚千圓より千九圓九拾九銭と六

一圓青色印紙を一枚を事

第七條

印紙貼用は若し必証書受取人の目録におき

て其印紙を檢査の上貼用可成事

其法左に如し

假令ハ受取之時ハ

覺

一金何圓………

一金何圓………

金何圓

右之通受取也

年号
月日 何之誰○

誰

請証文之時ハ

覺

一金何圓也

右者………

年号
月日 何之誰○

誰

第八條

一 第一類受取証書數一錢之印紙を貼せ且相あひ

渡わたし及者ハ為過料金一圓さうりくせきんて為差出事

一 第二類諸証書等之印紙を貼せ且お渡し及者

ハ為過料書面金言々十分一ウ為差出事

一 十圓以上之寫たがを曲まけて十圓以下之言ことば作つくる

し印紙を貼せ且一々第二類之証書等を貼

そのの披露頭ろんごすにおよび返料正當金まふごう言ふ
半言可る差出事

一 官許賣捌所わんぎょばいばつしよ外ほかにおいて印紙買取者おしじりかひり未取
るとらおいてハ為過料印紙代價おしじりしろ之五百倍ごひゃくばいの差
出密賣しつうりハ者ハ印紙代價おしじりしろ之千倍せんばい可る
差出事

一 且印紙買取後おしじりかひりごち不用ふよう之付返賣かへりばい者ハ
發者はつしやハ

元買取及賣捌所もとかひり及びばいばつしよ返却かへり主しゆ一賣捌所ばいばつしよ之於お

元賣渡もとばいわた年月日附お札つきがは之これを定價ていりやう之四分引

即定價十圓をきり九圓六十銭とすを以て買揚かひあく原もと一一枚二枚いちまいにまい

切放きりはなち及分及びぶん買揚かひあにお成教なりかへり枚連まいづら續つづい事ことハ分ぶん

限り及事

印紙高

三府五港之分一ヶ月真敷大概

淡黒色印紙

三十万枚

此金三千圓

橙黄色印紙

五万枚

此金二千五百圓

紅色印紙

二万五千枚

此金二千五百圓

黄色印紙

八千枚

此金二千圓

綠色印紙

此金三千圓

四千枚

青色印紙

此金千五百圓

千五百枚

印紙三十六万八千五百枚

此金一万三千五百圓

縣一ヶ月液高

府之半高

差向石三ヶ月分宛在液也

右之通被仰出之額觸達系此旨可相
心得者也

明治六年三月廿五日 神奈川縣參事 高木久成

三ノリ...
...
...

蚕種製衣造之儀^{のいこ ころしく}付而者今般國々

養蚕場^{ようさんば}蚕業熟達^{さんごうじゆくしんじゆ}之者共致撰舉^{あたらひ}

大總代^{おほそうだい}申付實際^{まじふ}之所見^{ところみ}泰酌^{たいしやく}之夫規則

改定^{かいてい}之上般頒布^{ふれ}相成候得共兎角^{うづまじ}従来^{もと}之

弊習^{へいしゆ}も有之蚕種製衣造及商人共苦眼前^{めがまへ}

之利迷^りの元方^{もとむかひ}之景状^{けいじやう}と國內用原蚕種^{こくなくふつてもちゆのもしんじゆ}

榊

之分量ト按算セテ猥外國輸出ニ已
相趨終上好之蚕種者國內竭之可立至哉
之勢而實不都合之次第候条向後各地方
官おのり大総代せこやく組世話役しんごん申諭しんごん母年
蚕種出来之時節組々以本年之出来
高と総計さうご且其地方ちかし每來歲國內用

原蚕種之物數もとの概算かざんし組々之申合しんご
よと相當之割合たいがひ設國內用之手當
いたる候上而外國輸出之分取究候様
可致候事

但年々右計算取調出来候々其時々
大総代せこやく地方官ちかし差出地方官さしだちヨリ

朱書

當省^江相届可申事

附大總代世話役等無之養蚕場

原蚕種用之取調方者每村戶長

而取扱可申事

右之通大藏大輔井上馨殿由達有之月

觸示者也

壬申六月

神奈川縣廳

右ノ通大藏大輔井上馨殿
由達有之月
觸示者也
壬申六月

第二十五号布告^{ふけ}鳥獸獵規則^{とりうしうりそく}第十

条ノ第二ノ条左ノ通ニ改^{かへ}在^ある此^{こゝ}段^{くだ}由^{よし}達^{たつ}

左^{ひだり}事^{こと}

一 假令^{たとへば}郊外^{のちがひ}ト雖^{いへど}モ銃^{とう}丸^{だま}ノ通^{とほ}リテ人^{ひと}ヲ害^{がい}

スルノ恐^{おそ}レアル所

第二十五号布告鳥獸獵規則ノ第

九条十六条ノ六ノ字五ノ字ノ誤^{あやまり}ニ改^{かへ}間

以爲相違取事

明治六年二月

太政官

右之通被仰出之趣觸違承此旨
可相心得者也

明治六年三月四日 神奈川縣權令大江卓

但遊獵罰金中ニ拾二錢ト有之支

十二圓ノ額ナリ

三ノ多ク倍々有之

方不及裁判旨可申渡事

第七條

御布告前身體限り申渡濟の分ハ申渡の通り可
及處分事

第八條

従前出訴吟味中和解ノ家祿を引當となし新規
證文ハ改め濟口聞届あるハは布告に依り不及
裁判事

第九條

従前華士族の名目を用ひある貸附金の三百號
此の布令に依り取上へらるる事

第十條

動産不動産を債主に質入しある者の取上裁判
可致事

但沽券状を債主に渡し金銀を借用せしもの
を本條に准し質入と看做すべし事

右の通達之趣觸達条此旨可相心得もの也

明治六年一月十二日 神奈川縣權令大江卓

了りてしるる事

管轄廳ニ於テ聞届可申事

明治六年一月廿三日 太政官

右之通被 作出之趣觸達条此方可相心得也

明治六年一月廿三日 神奈川縣權令大江卓

二〇二〇年三月廿五日

金納之義古蹟及分文聞届生事

一 米之外 籾もみ 大小 麦むぎ 大小 豆まめ 荳まめ 荳まめ 種あひ 粟あひ 黍あひ 稷あひ

二 外之 雜ざい 穀こく 其 所 最 高 市 町 十 月 朔 日

十一月十五日 且 日 上 品 平 均 直 限 以 石 代 金

納可致事

但 夏 稅 雜 穀 納 之 分 之 地 之 者 夏 納 有 之

分 之 從 前 納 期 月 之 前 月 朔 日 納 月 十五 日

最寄市町平均直限以上納付儀と可
心得事

一 送前金銀不融通之地は石代上納難
致限を課及分米納可下月事

但石納之分廻漕取扱方之儀も不日委納可

右通事

一 石代納付之宛取上簿書石納十月晦日

各府縣貢米之儀四方へ正納扱方最
寄市町十月上米平均直限を以石代
相納四方之分金納本課及向主生年

十月中納所本場へ管下上米直限を加
平均を以石代金納之若去来五月中未達
置及未右石代直限何ヲ經未安及主去
村之収獲之米品凡石取を量備置及二付

遠隔の國に在る自他痛米欠減おそ
出来其上納證書付差出方定期と
其得去石代納之石若正納トお換り其
外多少不都合之次第有之付今般食
儀之上當任甲年より出来田畑負米
論租税米之志、生所最寄市町十月
朔日より十一月十日正日と米平均直陸

改正式千五百圓以上ヲ清取ヘシ

第七則中掲載預り施券を發行自
六月以後タラハ持券次者新貨交換スヘシ
改正三月以後タラハ新貨交換スヘシ

増補二則

第一則精式分判五千兩以上ノ高ナラハ
施券引換ノ為メ之ヲ清取ヘシ

第二則惡武分判壹方兩武分判、數貳方個以上ノ
高十六兩券引換ノ為メ之ヲ請取ヘシ

但兩則共請取方てつ續キ精米料ホ
考古金銀混合地重塊ノ通タルニ

右ノ通注 仕出ノ趣 酌達意此方お
心ほとの也

三申
十月廿日 神奈川縣權令大江卓

一 訴狀其外書類認料 一枚六行十字半付 拾 錢

一 證人并引合人手由 一日二付 五拾 錢
但差添令儀進高定則
相立迄以例ニ依

一 同族費 一里付 拾 錢
但前同所
但歸後も同所

一 被告人真事者手由 一日二付 五拾 錢
但原告人真事時ハ此手
高ナレ
但他所ノ生坐席者ハ
貳拾五錢増ス

一同旅費

一里二分 拾錢
但歸路も同所

一通舟料

一日二分 三圓

一翻譯料

一頁十六折十五字以内
但壹枚以下も同價 貳圓

一使賃

一里二分 拾錢五里以内

但五里以上六歸路も同所

一郵便電信料

定價

可^てく^り及^らず^る自然^に父母^の祖^の之^の績^を顯^はす^べし

之^の義^を奉^じて^は一^の有^らず^る間^に前^の文^の之^の次^を學^ぶ

相心得精々石洞各遺失差出可^しる

隱^の之^の置^は後^日も顯^はす^べし^る及^ら古^ト之^の各^の用^二

付スベクは間此段吃^つる心得違^はず^る之^の標

一のち群^る者也

静惠神奈川縣權令大江卓

ナリモノハ多クモシラズ

皆^{さい}後^ご下^げ市^し在^あ舊^{きゅう}家^か又^{また}主^{しゅ}祖^そ先^{せん}ヨリ^{より}数^{すう}代^{だい}之^の
所^{ところ}役^{やく}儀^ぎホ^も古^こ勅^{とく}取^と者^{もの}之^の中^{ちゆう}ニ^に山^{さん}林^{りん}田^{でん}相^{しやう}
郡^{ぐん}境^{けい}界^{がい}ホ^も古^こ舊^{きゅう}記^き古^こ帳^{ちやう}面^{めん}又^{また}古^こ故^こ先^{せん}之^の
言^い傳^{でん}一^{いつ}抄^{しやう}記^き録^{ろく}之^の貯^{たくわ}藏^{ざう}致^{いた}名^な者^{もの}古^こ勅^{とく}中^{ちゆう}ニ^に
今^{いま}日^{にち}市^し政^{せい}事^じ上^{じやう}ニ^にお^おわ^わる^る要^{えい}用^{よう}之^の書^{しよ}類^{るい}
可^か省^{しやう}之^の実^{じつ}ニ^に國^{こく}家^か之^の重^{ちゆう}寶^{ほう}止^とり^り致^{いた}名^な者^{もの}古^こ右^う
等^{らう}之^の品^{ひん}多^{おほ}ク^くハ^は教^{きやう}亂^{らん}之^の易^いキ^き物^{ぶつ}ナル^{なり}之^の銘^{めい}之^の水^{すい}ク

日記

挿入文書

持傳もちつたへ生者ひつぎよう者しやう父祖ふそヨリ心こころ拭ぬぐて之これを
 由よしり身み持と之これを至いたる及および終おひルヲ世間よこしま一般いふん之これ習まな保たも
 之これ只ただ一家いっか之内うちに秘ひ藏かく之これ置お徒いとらく之これ蠢お魚う之これ
 災わざ害がいおこ嬰あらせ授た之これ致いたるは一ひと國くに家か有あ
 用もち之これ亦また無な用もち之これ父祖ふそ對たいシて不ふ存ぞん之これ
 可か多た之これ遺い憾が之これ可か依よ之これ今いま般ぱん右みぎ攝しやく之これ
 書しよ類るい不ふ持と致いた生な者しやう之これ限かぎ者しやう之これ差さ也なり
 限かぎ者しやう之これ差さ也なり

限可差公事

- 一本いっぽん年ねんより致いたる依より所ところ有あ場ば石いし代しろ産さん地ち之これ仰おほ付つけ
- 及および之これ身み多た之これ皆みな濟せい之これ限かぎ之これ派はい列れつ紙し之これ通とお改かへ正ただ
- 其その事こと
- 一いっ位い前まへ其その地ち之これ分ぶん及および九月くわがつ皆みな濟せい可か致いた事こと
- 一いっ年ねん限かぎ之これ地ち拂はら付つけ所ところ置お及および分ぶん年ねん旧ふる來きた安やす五ご限かぎ
- 定さだ石いし代しろ以もつて地ち之これ分ぶん年ねん之これ意い皆みな廢ふし之これ可か

右之通相定々事

壬申八月十日

太政官

右之通申達之旨筋示間此旨了相心得事也

^主神奈川縣願

主事 十日 申 奉 所 望 事 云々

府縣

先般田池永代賣買被差許ハニ付自今實入
書入致シハ節ハ左ノ規則ノ通可相心得事

明治六年一月十七日

太政官

地所實入書入規則

第一條

金穀ノ借主^地ヨリ返済スヘキ證據トシテ貸主
主^金ニ地所ト證文トラ渡シ貸主其作徳米ヲ以テ

貸高ノ利息ニ充ケラ地所ノ賃入ト云フ

第二條

金穀ノ借主^{地主}ヨリ返済スヘキ證據トシテ貸主^{金主}
ニ地所引當ノ證文ノミヲ渡シ借主ノ作徳米ノ全
部又ハ一部ヲ貸主ニ渡シ利息ニ充ケラ書入ト云フ

第三條

金穀ノ借主^{地主}ヨリ返済スヘキ證據トシテ貸主^{金主}ニ

地所引當ノ證文ノミヲ渡シ借主ヨリ其利息
トシテ米又ハ金ヲ拂ヒケラモ亦書入ト云フ

第四條

地所ヲ賃入ニ致シル節ハ地券ヲモ相渡シ可ル其
年期ノ儀ハ三ヶ年ヲ限ル可尤三ヶ年以下期限
取極^ハ儀ハ勝手タルヘク且ツ年限取極^ハ産^ハ判
然證文面ニ記載致シ置可申事

但書入ノ儀ハ地券ヲ相渡スニ及ハス其年限長短
共本文ノ限ニアラスト雖モ双方相對ニテ取極ル年
限ハ本文同極證文面ニ記載致シ置可申事

第五條

質入又ハ書入ノ地所期限ニ至リ貸主借主相談
ノ上金穀ヲ返サシテ地所ヲ引渡ル節ハ舊地主
其地券ノ裏ニ金主へ可引渡旨相認ノ其地ノ戸

長加判ノ上金主ヨリ新地券書替可願公事

第六條

質入ノ地所ハ金主ニテ其地所耕作可致答ニ付
テハ地租諸役トモ總テ金主ニテ可相勤事
但其段管轄廳へ届出證書可々公事

第七條

書入ノ地所ハ地主ニテ耕作致シハ儀ニ付地租諸役

トモ無論ニ地主ヨリ可相勤事

但管轄廳へ届出ルニ不及事

第八條

管轄違ノ者或ハ同管轄ト雖モ懸隔ノ地
所ヲ質ニ取リケ節ハ其現地ノ村町へ金主ノ
名代人相定置其地租諸役トモ差支無之極
可為相勤事

第九條

質入又ハ書入證文ニ必ス其村町戸長ノ奥書
證印ヲ取ル可シ其村町戸長ノ役場ニ奥書
割印帳ニ備置證文ノ奥書割印ヲ願出ル時
ハ帳面ト證文トニ番号ヲ朱書シ割印ヲ押
奥書ヲ為ス可シ若シ戸長ノ奥書並ニ割印
十キ證文ハ貸附ノ證接ニ不相成事

但戸長不在ノ節ハ其旨ヲ記シ副戸長
奥書調印ス可シ

第十條

一箇所ノ地ヲ二重ニ賣ニ書入ル儀ハ不相承ル
得共若シ第一番金主へ引當ニ入置ル事ヲ第
二番ノ金主承知ノ上ニテ地所代價ノ餘分ヲ
見込一ヶ所ノ地所ヲ引當ニ借添ヘ致シル儀ハ

不苦尤引當ノ地所身代限ノ交分ニ至リ糶賣成
候節ハ右ノ代金ヲ以テ先ツ第一番ノ者へ元利ノ金數ヲ
引渡シ其餘金ヲ以テ第二番ノ者へ元利ノ金數ヲ引渡
シ第三番以下右ニ準シ引渡シ申ス可ク若シ糶賣ノ金
高ヲ以テ先第一番ノ金主へ元利ノ金數ヲ引渡シ其
餘金不足スル時ハ第二番ノ金主へ不足ノ儘引渡スヘク
第三番以下ハ皆損失ト心得ヘキ事

但第二番ノ金主へ受取ハ證文ハ地所代
價ノ餘分ヲ見込借添ヘル旨書載セ可キ事

第十一條

地所ハ勿論地券ノミタリ凡外國人へ賣買能質入
書入オ致シ金子請取又ハ借受ハ儀一切ハ相違ナク

第十二條

質入半季中天災ニテ地所流亡等其地全形

ヲ失スルニ至ル時ハ地券モ消滅ト可心得地所
野地所等ニ变换シ又ハ欠崩等其地ノ半部或
ハ三分ノ部形跡ヲ存セサルニ至ル時ハ右变换地
及残存地ニ應シ規則ニ基キ地券書替フ願
出儀ニ付貸金穀高モ其割合ヲ以テ相減シ
證文書替ハ儀ト可相心得事

但貸主借主相對示認ハ格別ノ事

第十三條

賃入ノ地所年期中天災ニ因リ荒蕪ト相成
ハ貸主^{主金}ヨリ起返ノ見込ヲ定メ借主^{主地}承諾ノ
證書ヲ取り其管轄ヘシ願出充入費ハ借主ヨリ
償フ可キ事

但借主起返ノ入費ヲ出スル能ハサル中ハ證
書ヲ以テ其地所ヲ貸主ニ引渡シテ申充

相對示認ノ交置ハ格別ノ事

第十四條

當今テ賃入又ハ書入ニ致シ置年期中ノ分ハ總
テ前文規則ニ照準シ當七月限リ證文相改
可申事

右之通相定候事

右之通称 仰出之趣 觸達条状 首可心得也

明治五年二月十三日

神奈川縣権令大江卓

二〇二〇年三月十日